

第3章 大友氏遺跡及び整備計画地の概要と課題

1. 史跡指定の状況

本市では、広大な大友氏遺跡の史跡指定について、事前の発掘調査によってその存在が明らかとなった範囲の中から、都市計画事業との調整を図りつつ優先順位を検討し、各種条件のそろった場所から指定地の拡大を進めてきた。

大友氏館跡の庭園遺構が発見された地点ほかを対象として、平成13年8月13日に第1次指定が行われたのを皮切りに、第17次となる平成30年2月13日の追加指定まで継続的に行われている。

指定の範囲は、当初は大友氏館跡・旧万寿寺地区を中心に進められたが、最近では上原館跡（第14次）、推定御蔵場跡（第15次）、唐人町跡（第16次）にも対象地区を広げており、直近では大友氏館跡南東部にあたるJR日豊本線旧軌道敷部分について追加指定が行われた（第17次）。

なお、史跡の指定名称は、第5次指定にあたる、平成17年3月2日付の旧万寿寺地区の追加指定に伴い、「大友氏館跡」から「大友氏遺跡」に変更された。（指定範囲は図3-1参照）

表3-1 史跡指定の面積一覧

対象地区	指定面積 (㎡)
大友氏館跡	34,850.74 ㎡
旧万寿寺地区	46,147.58 ㎡
上原館跡	3,481.99 ㎡
推定御蔵場跡	3757.00 ㎡
唐人町跡	910.00 ㎡
合計	89,147.31 ㎡

平成31年3月末現在

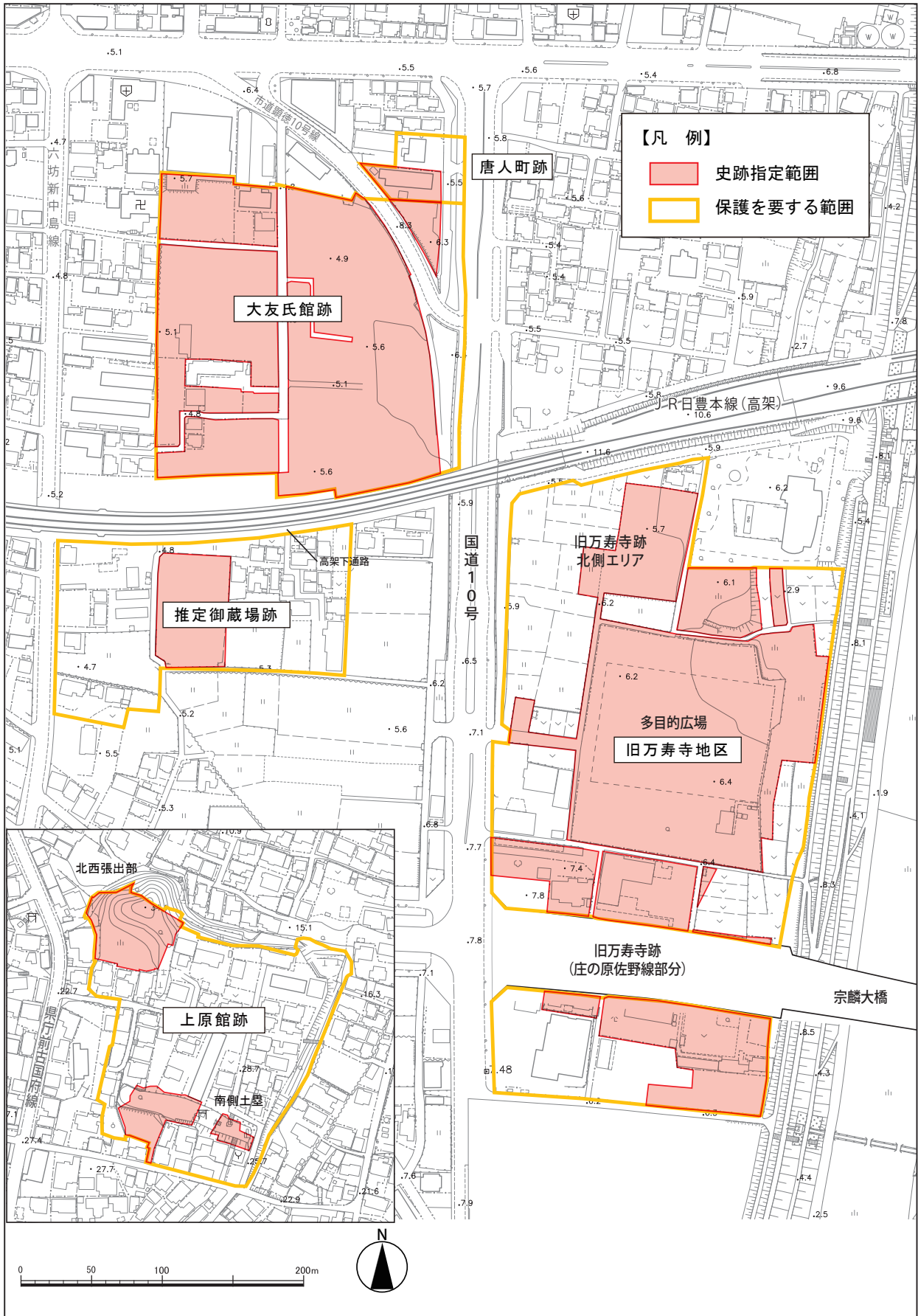


図 3-1 史跡大友氏遺跡指定範囲図

2. これまでの史跡整備への取り組み

(1) 史跡指定後の歴史公園整備に向けた経緯

表 3-2 の大友氏遺跡の保存活用に関する履歴に示すように、大友氏遺跡の保存の取り組みは、大友氏館跡の庭園跡が発見された平成 10 年度を契機に始まり、文化財保護とまちづくりの両面から様々な検討や調整を行いつつ、史跡指定範囲や歴史公園の範囲を拡張してきた。現在の史跡指定の面積は、合計約 8.9ha となり、「大友氏遺跡歴史公園」は、旧万寿寺地区と推定御蔵場跡を含む 17.5ha に拡張している。

また、本市では、保護を要する範囲の拡大を進めつつ、主に大友氏館跡を対象範囲とした整備事業に向けた検討も行ってきた。平成 16 年度に大分市中心部のまちづくりを目的とした「おおいた都心まちづくり会議」が、市長部局関連課の連携によって組織されたことから、教育委員会では、協調する組織として「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会」（委員長：河原純之）を設置した。検討結果は、平成 17 年度末に報告されている。この報告の提言を踏まえ、「大友氏館跡」区域の復元整備の具体化に向けた調査として、平成 24 年度から庭園部分の発掘調査に着手し、引き続いて平成 29 年度からは中心建物域の発掘調査に着手している。

都市計画上の取り組みとしては、平成 19 年 1 月 26 日には大友氏館跡を含む公園予定地内の 3.68ha について都市計画公園事業として認可を受けた。その後、平成 21 年 12 月 18 日と平成 24 年 5 月 7 日には、史跡の追加指定を受けた箇所について都市計画公園事業の認可範囲にも追加された。これにより現在の都市計画公園事業認可範囲は、8.55ha となっている。

平成 24 年度には、大友氏遺跡の保存と整備に向けた本格的な取り組みとして、保存管理計画と整備基本構想の検討に着手し、平成 25 年度には「大友氏遺跡保存管理計画・整備基本構想検討委員会」を設置し、平成 26 年 3 月 31 日に大友氏遺跡保存管理計画を策定した。また、同年度には、庁内関係課 17 課（令和元年 5 月からは 18 課）で構成する「大友氏を活かしたまちづくり庁内検討委員会」を設置して歴史公園整備に向けた具体的な検討に着手している。平成 26 年度には、「史跡大友氏遺跡整備基本計画検討委員会」を設置し、指導・助言を受けながら本計画の策定に取り組み、平成 27 年 12 月に「史跡大友氏遺跡整備基本計画（第 1 期）」を策定した。この計画では、第 1 期整備として短期整備（概ね 5 年）と中期整備（概ね 10 年）で主に大友氏館跡を中心とした整備を行うこととしている。

基本計画に基づく短期整備としては、大友氏館庭園跡の整備を進め、平成 28 年度・平成 29 年度で設計、平成 30 年度から令和元年度に整備工事を行い、令和 2 年 4 月の公開を目指している。なお、基本計画に基づく本格的な整備事業に着手するにあたっては、平成 27 年度に「大友氏館跡庭園整備検討委員会」を設置、平成 28 年度には「史跡大友氏遺跡整備検討委員会」を設置し、整備内容に対する指導・助言を得ながら、事業を推進している。

表 3-2 大友氏遺跡の保存活用に関する履歴一覧

年月日(年次)	項 目
平成10年度	大分駅周辺総合整備事業に伴う代替地にて大友氏館跡庭園跡確認
平成11年3月	国指定史跡として保存の方向性が打ち出される
平成11年度	国庫補助事業による大友氏館跡範囲確認調査を開始
平成11年8月18日	市長の諮問機関として「大友氏遺跡検討委員会」を設置
平成13年8月13日	大友氏館跡の一部について、国史跡の指定を受ける
平成13年度	指定後、史跡指定地の公有化に着手
平成14年 3月31日	「大友遺跡検討委員会報告書 - 大友遺跡群活用まちづくり検討報告 - 」 が提出される
平成17年 3月 2日	旧万寿寺地区の追加指定(第5次)。史跡指定名称が「大友氏遺跡」に改称される
平成18年 3月31日	都市計画法による公園区域指定⇒『大友氏館跡歴史公園』(約6.5ha)
平成18年 3月31日	「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会報告書」が提出される
平成19年 1月26日	都市計画法による都市計画公園事業認可⇒『大友氏館跡歴史公園』 (大友氏館跡の一部:3.68ha)
平成20年 4月25日	旧万寿寺地区に、大友氏遺跡体験学習館をオープン
平成21年12月18日	都市計画法による都市計画公園事業の変更認可 ⇒『大友氏館跡歴史公園』(従来の範囲に大友氏館跡南端を一部追加:4.09ha)
平成23年 3月28日	都市計画法による公園区域の変更⇒『大友氏館跡歴史公園』 (大友氏館跡に推定御蔵場跡を追加:計約9.5ha)
平成24年 3月13日	都市計画法による公園区域の変更⇒『大友氏館跡歴史公園』 (旧万寿寺地区を追加:計約17.5ha)
平成24年 5月 7日	都市計画法による都市計画公園事業の変更認可 ⇒『大友氏遺跡歴史公園』(旧万寿寺地区の一部を追加:8.55ha)
平成25年10月15日	「大友氏遺跡保存管理計画・整備基本構想検討委員会」の設置
平成25年12月16日	市役所庁内に「大友氏を活かしたまちづくり庁内検討委員会」の設置
平成26年 3月31日	史跡大友氏遺跡保存管理計画の策定
平成26年 6月17日	「史跡大友氏遺跡整備基本計画検討委員会」の設置
平成26年 10月 6日	上原館跡の追加指定(第14次)
平成27年 10月 7日	推定御蔵場跡の追加指定(第15次)
平成27年12月24日	史跡大友氏遺跡整備基本計画(第1期)の策定
平成28年 1月 6日	「大友氏館跡庭園整備検討委員会」の設置
平成28年 6月 9日	「史跡大友氏遺跡整備検討委員会」の設置
平成29年 2月 9日	唐人町跡の追加指定(第16次)
平成30年 2月13日	大友氏館跡南側の鉄道残存敷の追加指定(第17次)
平成30年 8月	大友氏館跡庭園跡整備工事に着工
平成30年 9月30日	大友氏館跡内に南蛮BVNGO交流館オープン

(2) 公有化の状況

本市では平成 13 年度の史跡指定以後、大友氏遺跡の史跡購入事業を開始し、平成 30 年度末時点で保護を要する範囲に対し、約 5 割の史跡指定を完了し、また指定地のほとんどについて公有化を完了している。このうち大友氏館跡は、史跡指定と公有化が最も進んでおり、指定・公有化ともに 75% を越えているが、上原館跡と推定御蔵場跡は 20% 未満の公有化にとどまっている。

表 3-3 史跡指定面積と公有化面積（平成 31 年 3 月末）

	保護を要する範囲	史跡指定面積(登記簿面積) (保護を要する範囲に対する割合%)	公有化面積(実測面積) (保護を要する範囲に対する割合%)
大友氏館跡	46,000㎡	34,850.74㎡ (75.76%)	35,639.24㎡ (77.48%)
旧万寿寺地区	79,000㎡	46,147.58㎡ (58.41%)	44,155.12㎡ (55.89%)
上原館跡	24,000㎡	3,481.58㎡ (14.51%)	4,384.28㎡ (18.27%)
推定御蔵場跡	22,000㎡	3,757.00㎡ (17.08%)	4,012.66㎡ (18.24%)
唐人町跡	2,200㎡	910.00㎡ (41.36%)	946.52㎡ (43.02%)
合計	173,200㎡	89,147.31㎡ (51.47%)	89,137.82㎡ (51.47%)

(3) 基盤整備の実施と暫定公開

公有化が完了した箇所については、本市が所有者として管理にあっている。本格的な史跡整備に着手するまでの間にも史跡の活用を図るため、平成 14 年に大友氏館跡に説明板を設置し、平成 20 年 4 月には旧万寿寺地区に大友氏遺跡を中心とする情報発信と学習のための仮ガイダンス施設「大友氏遺跡体験学習館」を設置した。その後、平成 30 年 8 月末までの間、「大友氏遺跡体験学習館」を拠点として史跡地の活用が行われるようになり、年間利用者数は徐々に増え概ね 9 千人台で推移した。

平成 30 年に大友氏館庭園跡の整備計画が具体化したことをうけて、大友氏館跡での情報発信拠点の整備の必要が生じたことから「大友宗麟が生きた時代を体感できる施設」をコンセプトに、大友氏遺跡や大友宗麟の功績について、従来の体験学習機能に加えて工夫を凝らした展示や迫力ある映像で紹介する「南蛮 B V N G O 交流館」を平成 30 年 9 月に設置した。大友氏遺跡史跡ボランティアガイドの活動拠点となっており、幅広い層の来訪者に対応した施設として、開館以来 8 ヶ月で 1 万人の来訪者がみられた。

(4) 情報発信

大友氏遺跡の情報発信については、調査研究成果の公表、発掘調査の現地説明会

の他、大分市歴史資料館における特別展、大友宗麟と戦国時代の豊後地方に関する紹介を含む連続講座、関連市町と連携した「キリシタン・南蛮文化交流協定協議会事業」によるイベント開催など、大友氏遺跡体験学習館や南蛮 BVNGO 交流館を拠点とした活動も含め、様々な普及啓発活動を行っている。また、平成 29 年より、市民参加による史跡活用事業として、大友氏遺跡史跡ボランティアガイド事業を実施している。知識研修や接遇研修、修了試験を経て、ボランティアガイドとして登録し、南蛮 BVNGO 交流館や現地説明会において大友氏遺跡への来訪者に対し大友氏遺跡の魅力を発信しており、令和元年に市内で行われたラグビーワールドカップを契機とした海外からの来客を想定し、英語ガイド研修も行っている。

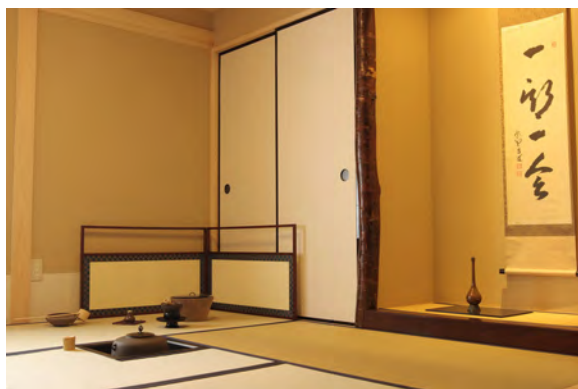
なお、大友宗麟・大友氏遺跡に関する効果的なプロモーション活動を進めるため、



南蛮 BVNGO 交流館 外観



歴史ゾーンで上映している映像



戦国時代の茶室をイメージした立体展示ゾーン



史跡ガイドによる館内ガイド



現地説明会での史跡ガイドの活動



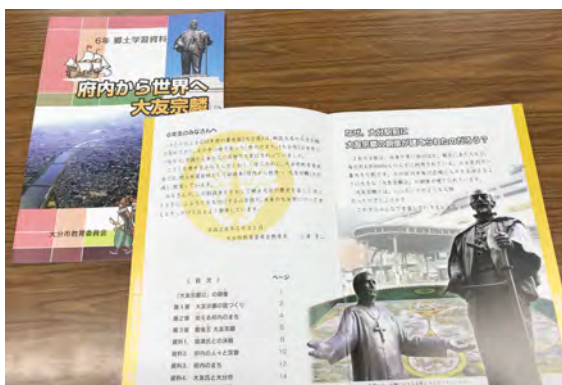
「大友プロモーション」に基づくイベント
「宗麟公まつり」

平成 25 年 3 月に提出された「大友宗麟プロモーションに関する報告書」をもとに、大友宗麟公を大分市民の誇りとして確立するとともに、本市の「顔」として全国に発信する取組を行っている。市民が企画し実施する事業に対する補助金の交付や史跡周辺における周知大型看板の設置、歴史講座の実施など市民をはじめ多くの方々へ、「史実に基づき」「学びながら伝え」「わかりやすく身近に感じる」、3つの視点から大友プロモーションを行っている。

(5) 学校教育との連携

大友氏遺跡への理解と愛着の醸成を促す取り組みは、学校教育と連携し、長期的な視野に立って行っている。平成 25 年度から大友宗麟副読本作成事業として、市内全域の小学校 6 年生を対象に社会科副読本『府内から世界へ 大友宗麟』を配布し、授業カリキュラムに組み込んでいる。

平成 29 年からは、子どもたちが郷土に対する理解と愛着を深め、大分の未来を担う次世代の育成を図ることを目的に、社会科副読本『府内から世界へ 大友宗麟』を出題範囲とした、「Funai ジュニア検定」を実施している。合格者については、希望者を Funai ジュニアガイドとして養成し、検定やガイド研修で学んだ知識を文化財課主催のイベント等で積極的に発信している。



社会科副読本『府内から世界へ 大友宗麟』



整備中の庭園を解説する Funai ジュニアガイド

3. 各地区の発掘調査等の経過と概要

大友氏遺跡に含まれる、大友氏館跡、唐人町跡、推定御蔵場跡、旧万寿寺地区、上原館跡の5つの遺跡について、それぞれの調査経過と概要を述べる。

調査履歴については、遺跡ごとに表3-4～3-8にまとめている。調査回数については、大友氏館跡を「館〇次」、中世大友府内町跡を「町〇次」、旧万寿寺地区を「万〇次」と略して表記した。

表3-4 大友氏館跡関係発掘調査一覧（平成31年3月末現在）

調査回数	地区	保護を要する範囲 内外区分	調査原因	調査面積 (㎡)	調査年度	報告書等	刊行年
館1次	庭園域	内	大分駅周辺総合整備事業	2200	平成12～13年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館2次	西側外郭付近	内	民間[マンション建設]	557	平成10～11年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館3次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	173.16	平成11年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館4次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	100	平成11年度	大友氏館跡3	平成30年3月
館5次	西側外郭・建物想定域	内	重要遺跡確認調査	50	平成11年度	概報Ⅰ	平成13年3月
館6次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	283	平成12年度	大友氏館跡3	平成30年3月
館7次	北西外郭域	内	重要遺跡確認調査	121	平成12年度	大友氏館跡1	平成26年3月
館8次	西側建物想定域	内	重要遺跡確認調査	60	平成12年度	概報Ⅱ	平成13年3月
館9次	北東外郭域	内	重要遺跡確認調査	6.5	平成11～12年度	大友氏館跡1	平成26年3月
館10次	北側建物想定域	内	重要遺跡確認調査	75	平成13年度	大友氏館跡1	平成26年3月
館11次	中央部	内	重要遺跡確認調査	48.5	平成13年度	大友氏館跡1	平成26年3月
館12次	南東部・庭園跡北	内	重要遺跡確認調査	550	平成14年度	概報2002年度	平成15年3月
館13次	北東建物想定域	内	重要遺跡確認調査	486	平成15年度	概報2003年度	平成16年3月
館14次	北東建物想定域	内	重要遺跡確認調査	150	平成16年度	概報2003年度	平成16年3月
館15次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	70	平成15年度	概報2003年度	平成16年3月
館16次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	320	平成16年度	概報2005年度	平成18年3月
館17次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	700	平成17～18年度	概報2005年度 概報2006年度 概報2007年度	平成18年3月 平成19年3月 平成20年3月
館18次	北側外郭域	内	重要遺跡確認調査	60	平成17年度	大友氏館跡1	平成26年3月
館19次	西側外郭・建物想定域	内	重要遺跡確認調査	419	平成18年度	概報2006年度	平成19年3月
館20次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	650	平成19年度	概報2007年度	平成20年3月
館21次	中心建物前面域	内	重要遺跡確認調査	523	平成20年度	概報2008年度	平成21年3月
館22次	東外郭域	内	重要遺跡確認調査	204.2	平成21年度	大友氏館跡1	平成26年3月
館23次	中心建物域～前面域	内	重要遺跡確認調査	540	平成22年度	大友氏館跡3	平成31年3月
館24次	北東建物想定域	内	重要遺跡確認調査	28	平成22年度	大友氏館跡3	平成31年3月
館25次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	498.1	平成23年度	大友氏館跡3	平成31年3月
館26次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	754.4	平成23年度	大友氏館跡3	平成31年3月
館27次	中心建物前面域	内	重要遺跡確認調査	110.4	平成23年度	大友氏館跡3	平成31年3月
館28次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	1860.6	平成24年度	大友氏館跡1・大友氏館跡2	平成26年3月 平成29年1月
館29次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	1567	平成25年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館30次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	508.1	平成25年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館31次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	3074.5	平成26年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館32次	庭園域～南外郭域	内	重要遺跡確認調査	300	平成26年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館33次	庭園域～中心建物域南側	内	重要遺跡確認調査	5200	平成27年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館34次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	540	平成28年度	大友氏館跡2	平成29年1月
館35次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	2750	平成28年度	大友氏館跡3	平成31年3月
館36次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	1820	平成29年度	大友氏館跡3	平成31年3月
館37次	中心建物域・西建物域	内	重要遺跡確認調査	450	平成29年度		刊行予定
館38次	北建物域	内	重要遺跡確認調査	2000	平成30年度		刊行予定
館39次	西建物域	内	重要遺跡確認調査	500	平成30年度		刊行予定
町63次A区	南外郭	内	重要遺跡確認調査	20	平成18年度	概報2006年度	平成19年3月
町63次C区	西側建物想定域	内	重要遺跡確認調査	38	平成18年度	概報2006年度	平成19年3月
町56次	西端	外	重要遺跡確認調査	76	平成17年度	概報2005年度	平成18年3月
町66次	西端	外	重要遺跡確認調査	48	平成18年度	概報2006年度	平成19年3月
町12次	館外東側	内 一部外	国道10号古国府拡幅事業	700	平成13年度	豊後府内4(第1分冊)	平成18年3月
町18次(西)	館外東側	内 一部外	国道10号古国府拡幅事業	450	平成13年度	豊後府内4(第1分冊)	平成18年3月
町52次	館外東側	内 一部外	国道10号古国府拡幅事業	1000	平成17年度	豊後府内15	平成22年3月
町91次	館外東側	内 一部外	国道10号古国府拡幅事業	240	平成22年度	豊後府内18	平成25年3月
町92次	館外東側	内 一部外	国道10号古国府拡幅事業	644	平成22年度	豊後府内18	平成25年3月
町93次	館外東側	内 一部外	国道10号古国府拡幅事業	93	平成24年度	豊後府内18	平成25年3月

表 3-5 唐人町跡関係発掘調査一覧 (平成 31 年 3 月末現在)

「町」: 中世大友府内町跡の略

調査回数	地区	保護すべき範囲 内外区分	調査原因	調査面積 (㎡)	調査年度	報告書等	刊行年
町14次	西側	内	民間[マンション建設]	125	平成13年度	大友府内6	平成15年3月
町11次	東側	外 一部歴史公園内	国道10号古国府拡幅事業	700	平成13年度	豊後府内17(第1分冊)	平成25年3月
町48次	東側	外 一部歴史公園内	国道10号古国府拡幅事業	70	平成16年度	豊後府内4(第1分冊)	平成18年3月
町72次	東側	外	国道10号古国府拡幅事業	300	平成18年度	豊後府内17(第1分冊)	平成25年3月
町80次	東側	外 一部歴史公園内	国道10号古国府拡幅事業	870	平成19年度	豊後府内17(第1分冊)	平成25年3月
町88次	東側	外	国道10号古国府拡幅事業	2028	平成22年度	豊後府内17(第2分冊)	平成25年3月

表 3-6 旧万寿寺地区関係発掘調査一覧 (平成 31 年 3 月末現在)

「万」: 旧万寿寺跡、「町」: 中世大友府内町跡の略

調査回数	地区	保護すべき範囲 内外区分	調査原因	調査面積 (㎡)	調査年度	報告書等	刊行年
万1次	境内中央東側	内	重要遺跡確認調査	388	平成17年度	大分市埋蔵文化財調査年報17	平成18年12月
万2次	万寿寺北側(堀之口町)	内	重要遺跡確認調査	270	平成18年度	大分市埋蔵文化財調査年報18	平成19年12月
万3次	境内北東部	内	重要遺跡確認調査	365	平成18年度	大分市埋蔵文化財調査年報18	平成19年12月
万4次	境内中央	内	重要遺跡確認調査	240	平成19年度	大分市埋蔵文化財調査年報19	平成20年3月
万5次	境内中央	内	重要遺跡確認調査	185	平成20~21年度	大分市市内確認調査概報2008	平成22年3月
万6次	境内西側	外	庄の原佐野線	1366	平成23年度	大分県埋蔵文化財年報21	平成25年3月
万7次	境内西側	外	庄の原佐野線	632	平成25年度	大分県教育庁埋蔵文化財 センター年報 2015	平成27年3月
万8次	境内西側	外	庄の原佐野線	1000	平成26年度	—	平成31年3月
万9次	境内東側	外	庄の原佐野線	660	平成26年度	—	平成31年3月
万10次	境内南側中央	外	庄の原佐野線	6100	平成27年度	—	平成31年3月
町6次	境内南側中央	内	民間開発	1600	平成12~13年度	大分市埋蔵文化財調査年報12	平成13年12月
町23次	境内中央	内	重要遺跡確認調査	—	平成14年度	大分市市内確認調査概報2002	平成15年3月
町24次	境内南側	内	範囲確認調査	57.6	平成14年度	大分市市内確認調査概報2002	平成15年3月
町20次	境内北西部	外	国道10号拡幅	2100	平成14年度	豊後府内7	平成19年3月
町34次	万寿寺西端	外	国道10号拡幅	700	平成15年度	豊後府内8	平成20年3月
町35次	境内南西部	外	国道10号拡幅	500	平成15年度	豊後府内12	平成21年3月
町42次	境内西側	外	国道10号拡幅	150	平成16年度	豊後府内12	平成21年3月
町43次	万寿寺西端	外	国道10号拡幅	400	平成16年度	豊後府内8	平成20年3月
町51次	万寿寺北西隅部	外	国道10号拡幅	2500	平成17年度	豊後府内15	平成22年3月
町53次	西側堀	外	国道10号拡幅	192.4	平成17年度	大友府内13	平成21年3月
町60次	西側堀	外	国道10号拡幅	156.15	平成17年度	大友府内13	平成21年3月
町68次	境内西側	外	国道10号拡幅	400	平成18年度	豊後府内12	平成21年3月
町73次	西側堀	外	国道10号拡幅	329	平成18年度	大友府内13	平成21年3月

表 3-7 推定御蔵場跡地関係発掘調査一覧 (平成 31 年 3 月末現在)

「町」: 中世大友府内町跡の略

調査回数	地区	保護すべき範囲 内外区分	調査原因	調査面積 (㎡)	調査年度	報告書等	刊行年
町37次	御蔵場推定地	内	集合住宅建設	37	平成15年度	大分市埋蔵文化財調査年報15	平成16年12月
町86次	御蔵場推定地	内	範囲確認調査	2189	平成21年度	大分市市内遺跡確認調査概報 2009・2010	平成23年3月
町89次	御蔵場推定地	内	範囲確認調査	937.7	平成22年度	大分市市内遺跡確認調査概報 2009・2010	平成23年3月
町5次A・B	御蔵場推定北辺境界ライン	外	JR日豊本線・豊線高架	4200	平成11~13年度	豊後府内2	平成17年3月
町25次-8	上町	外	六坊新中島線拡幅工事	75	平成17年度	大友府内9	平成19年3月
町25次-10	上町	外	六坊新中島線拡幅工事	125	平成18年度	大友府内12	平成20年3月
町124次	御蔵場推定地 柳町	内	民間開発	14	平成28年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2017	平成30年3月
町142次	御蔵場推定地	内	集合住宅建設	66.89	平成30年度	—	—

表 3-8 上原館跡関係発掘調査一覧 (平成 31 年 3 月末現在)

調査回数	地区	保護すべき範囲 内外区分	調査原因	調査面積 (㎡)	調査年度	報告書等	刊行年
1次	館南東隅	内	史跡整備	93.03	平成5年度	大分市埋蔵文化財調査年報4	平成5年12月
2次	館中央~南東部	内	汚水・雨水施設	100	平成11年度	大分市埋蔵文化財調査年報11	平成12年12月
3次	館南西部	内	個人住宅建設	60	平成11年度	大分市埋蔵文化財調査年報11	平成12年12月
4次	館内北側	内	個人住宅建設	20	平成12年度	大分市埋蔵文化財調査年報12	平成13年12月
5次	館内北側	内	汚水・雨水施設	60.7	平成12年度	大分市埋蔵文化財調査年報12	平成13年12月
6次	館内北西部	内	集合住宅建設	25.4	平成21年度	大分市埋蔵文化財調査概報2010	平成22年12月
7次	館西側	内	集合住宅建設	6	平成26年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2015	平成28年3月
8次	館中央	内	個人・集合住宅建設	63	平成28年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2017	平成30年3月
9次	館東側	内	集合住宅建設	40.94	平成29年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2018	平成31年3月
10次	館中央	内	個人住宅建設	49	平成29年度	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2018	平成31年3月

(1) 大友氏館跡

大友氏館跡は、戦国時代の豊後府内のほぼ中央に位置し、大友氏の領国支配の拠点として14世紀後半～末（10代親世の頃）以降整備され、16世紀末の島津軍の豊後侵攻による廃絶まで継続的に営まれたと推定される。

15世紀代には、中心建物付近に広い範囲で大規模な整地が行われ、16世紀頃になると館南東部分に庭園が造営される。庭園は数度の造り替えが認められ、16世紀末の最終段階には全国屈指の巨大な池を伴う庭園が整備されている。また、この時の中心建物は大型の礎石建物と推定される。

館の規模は最盛期には約200m四方に拡張され、四周を二条の溝や築地により囲まれていた。出土遺物は、饗宴・儀礼に用いられた莫大な量のかかわらけの他に、中国製高級陶磁器類がみられ、室町将軍同様に威信財としての唐物を珍重し、座敷を飾っていたと考えられる。こうした大友氏館跡の状況は、室町幕府の規範を遵守する守護館の典型を示すものとされる。

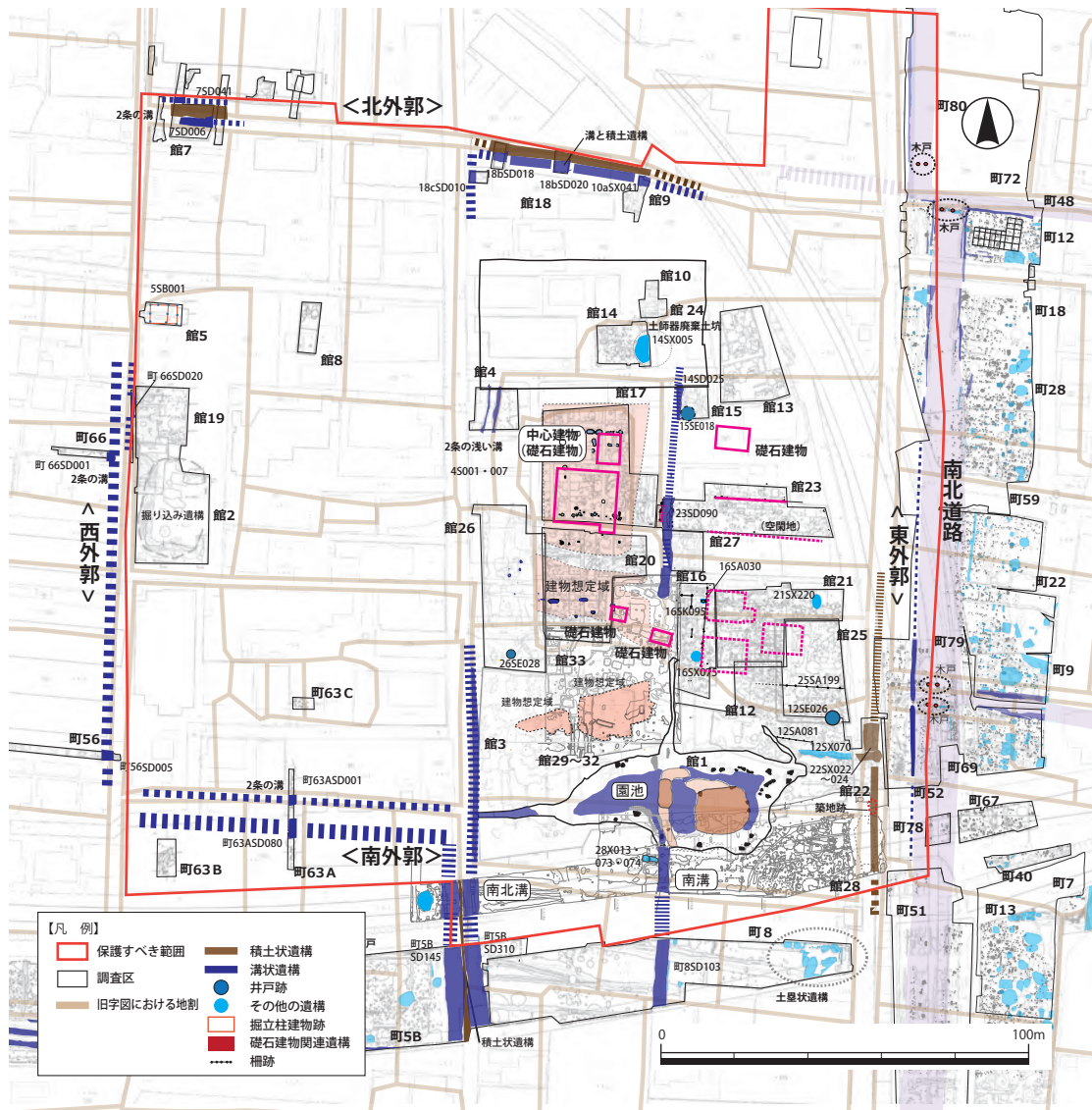


図 3-2 館V期 調査状況

①発掘調査の経過

大友氏館跡の発掘調査は平成10年度に庭園部からはじまり、平成31年3月末時点で39次調査まで行っている。

②大友氏館跡V期の概要

これまでの調査の結果、遺跡の形成期・最盛期・廃絶期が明らかになっている。遺跡の形成が顕著となるのは14世紀後半以降であり、調査成果に基づき遺構変遷をI～VI期に区分している。

以下では、大友宗麟・義統による館の拡張及び庭園等の施設拡充が行われた、遺跡の最盛期にあたるV期を対象に、外郭・庭園・中心建物の調査概要を述べる。

外郭：外郭域の調査地点は、館7・9・10・18・22・28次、町56・63・66次調査区が該当する。これまでの調査により、北外郭・西外郭・南外郭の下部構造及び東外郭の状況が判明している。北・西・南外郭の調査所見を総合すると、外郭の下部構造は幅1.5～2.0mの平行する2本の溝とこれに挟まれた幅約4.0～4.5mの空間に粘質土と砂質土を交互に積み上げたものである。

東外郭においては、館28次調査で、築地塀の痕跡と考えられる砂・粘質土・小石(砂利)を4～5cm厚で薄く突き固めた積み土状遺構が約0.5mの厚さで検出された(検出標高5.9～6m)。館22次調査では、築地塀に伴うと考えられる掘り込み地業の痕跡も検出されている。

【西外郭】

調査地点	町56・66次		
概要	2つの調査地点において、同一と考えられる南北溝が推定部分も含め約80mにわたり確認される。検出された南北溝は想定される2条のうち外側の1条とされる。		
規模	溝跡	町56次	検出幅約2.4m(検出標高:3.75m)、最大深度約0.45m(底面標高:3.3m) 断面形状—逆台形状
		町66次	検出幅約1.4m(検出標高:4.1～4.2m)、最大深度約0.6m(底面標高:3.6m) 断面形状—逆台形状 壁面傾斜角度:東壁(塀側)120度・西壁(外側)140度
その他	焼けた壁土が出土している。 両地点の溝跡土層堆積状況より、2回の掘り直し跡が確認される。 溝跡に伴う積み土痕跡は未確認である。		

【南外郭】

調査地点	館28次・町63次A区<南西部>		
概要	町63次A区調査において、2条の東西溝が確認される。北溝と南溝の間に約6.0mの空地が存在する。館28次は南外郭推定地であったが、発掘調査の結果、外郭施設に相当する遺構は確認されなかった。		
規模	溝跡	町63次A区	北溝: 検出長約0.7m(検出標高4.45m)、検出幅約1.55m、最大深度約0.7m(溝底標高3.7m) 断面形状—逆台形状 壁面傾斜角度—南壁(塀側)123度・北壁(館内側)130度 *内側壁面の傾斜角度の方がやや傾斜が急である。

		南溝：検出幅→最大約3.0m+ α 、掘り直し後幅約1.5m（検出標高4.0m） 最大深度約1.7m（溝底標高2.3m）→深度約1.05m（溝底標高2.85m）→深度1.0m（溝底標高3.0m）→深度約0.7m（溝底標高3.2m） 断面形状—不定形な逆台形状 壁面傾斜角度—南壁（外側）141度・北壁（堀側）123度 *掘り直しにより次第に浅くなる。
その他	南溝は土層堆積状況より4回掘り直しが行われる。 南溝は掘削当初（最大規模）の段階は、他の外郭と比較し規模が大きい。 南溝には北方向から土が流入した痕跡がある。	

【東外郭】

調査地点	館22・28次		
概要	館28次調査では、部分的（島状）に積み土状遺構が確認された。 館22次調査では、外郭施設の基礎部と推測される掘り込み地業跡が確認された。		
規模	積み土状遺構	館28次	砂・粘質土・小石（砂利）を4～5cm厚で薄く突き固められた積み土（版築）が約0.5mの厚さで検出された（検出標高5.9～6.0m）。 積み土部と整地部境の標高5.4m。
	基礎跡	館22次	外郭想定部分において厚さ約0.2mの掘り込み地業跡が確認される（検出標高4.5m）。 北側壁面において、厚さ約0.1mの硬化した土層が検出された（検出標高4.9m）。
その他	館28次の積み土状遺構は、その構造より築地堀跡の一部となる可能性が高い。また、館22次調査で確認された堆積土及び掘り込み地業跡は、築地堀等の外郭施設設置に伴う地業跡と考えられる。		

【北外郭】

調査地点	館7・10・18次		
概要	館7次調査では、2条の溝跡が幅約4.5mの空閑を有して確認される。但し、当該時期の積み土痕跡は確認されなかった。 館18次調査では、2条のうちの南（内側）溝跡及び、積み土痕跡が確認される。		
規模	溝跡	館7次	北溝（外）：検出幅1.0m（検出標高3.65m）、深度0.4m以上（溝底標高は未確認） 断面形状—不明 壁面傾斜角度—南壁（堀側）140度・北壁（外側）110度 *ともに推定形状による
			南溝（内）：検出幅約1.5m（検出標高3.1～3.3m）、 最大深度約0.7m（溝底標高2.4～2.5m） 断面形状—逆台形状 壁面傾斜角度—北壁（堀側）115度・南壁（館内側）144度
		館10次	検出幅約2.0m+ α （検出標高3.9m）、最大深度約1.35m（溝底標高2.5m）→深度約0.8m（溝底標高3.05m） 断面形状—V字状に近似する逆台形状・緩やかな逆台形状 壁面傾斜角度—南壁（館内側）125度・北壁（堀側）143度
		館18次	検出幅約2.25～2.4m（検出標高3.9～4m）、最大深度約1.1m（溝底標高2.9m） 断面形状—V字形に近似する逆台形状 壁面傾斜角度—北壁（堀側）155度・南壁（館内側）135度 南壁（館内）125度・北壁（堀側）130～133度
	積み土	館18次	版築状の積み土有り（砂質土・シルト質土が5～10cm単位で互層状を呈す）
その他	溝跡からは、拳大～人頭大の礫や瓦の破片が出土している。		

庭園：V期の庭園遺構は、東西67m、南北30mの園池跡を伴う。園池跡は、地表面を約2m掘り下げ最深部付近には1mを超える巨石を用い、護岸石及び景石として配置する。

園池の構築過程は、はじめに園池部全体を掘削したあと、ほぼ全域にわたって灰色粘土を人工的に貼り付けている。これは、大友氏館跡が沖積地に立地し、地盤が砂質土主体となるため、漏水対策及び斜面等の維持のためと考えられる。但し、中島2の北東には一部粘土層が認められない地点があり、湧水点の可能性が高い。

園池跡内東側は、景石・護岸石を多く配置している。その東端部においては、巨石を配した滝石組1があり、園池跡東側のほぼ中心部には中島1がある。中島1の北側には、護岸石組としての景観があるのも特徴の1つである。これらの配置状況から、東溝から滝石組1、護岸石組という一連の水の流れがあったと考えられる。護岸石組周辺の池底に溜まった土には、種子や花粉が良好に残存しており、当時の植栽景観を復元する上で重要な所見が得られている。

園池跡内西側は、巨石の個数が、東側と比較すると少なく、局地的に配置しているのみであり、東側とは異なる景観を示す。また西側には、池底に拳大ほどの円礫等が多く見られ、池底から周辺斜面を化粧していたと考えられ、さらに南東箇所、南溝との接続箇所があり、滝石組2が設置される。

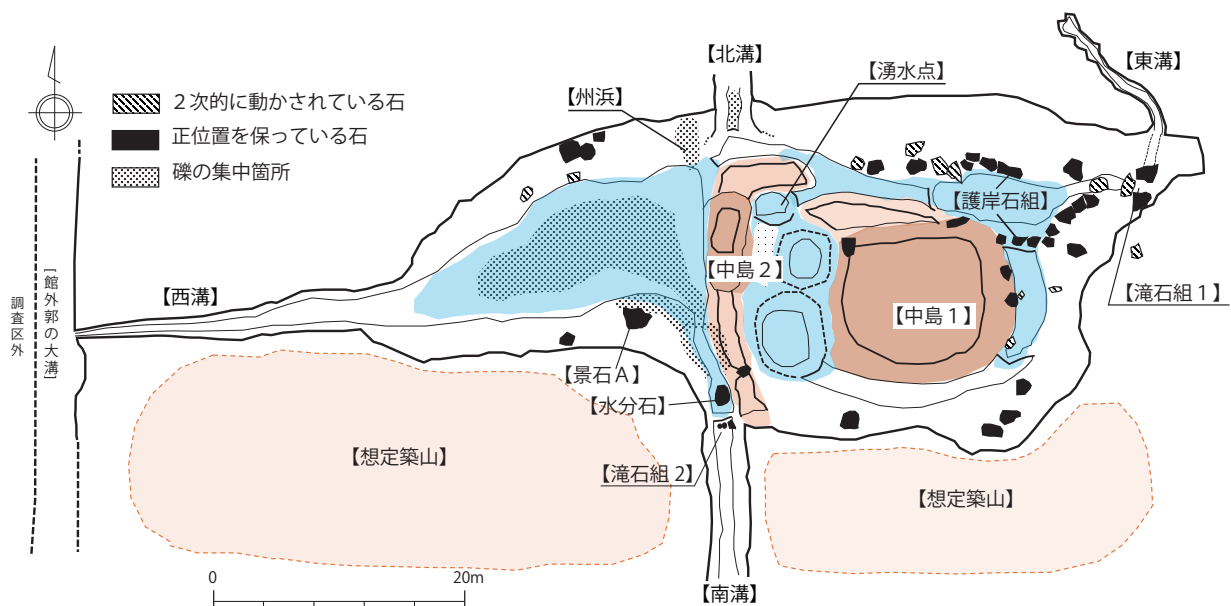


図 3-3 V期の庭園構造



輝石安山岩（大友氏館跡庭園西側景石）



阿蘇熔結凝灰岩（大友氏館跡庭園東側景石）

巨石の分布であるが、現状ではその多くは池底付近に置かれるほか、園池跡南側の陸地に配されるものもあり、護岸石や景石として位置付けられる。これら巨石の石材は、角閃石・輝石安山岩、溶結凝灰岩を主として使用している。安山岩・凝灰岩の一部は大分川上流域にあたる由布市挾間～庄内周辺で産出され、「永興石」ともよばれる凝灰岩は市内の南大分永興付近が産地として比定されている。

導排水施設としての溝跡は、園池跡の東西南北の4箇所、園池跡と接していることが確認される。南溝は、幅約3.0 m、深さ約1.0 mとやや規模が大きく、断面は逆台形～V字状を呈しており、町8次調査でも延長部が確認されている。土層観察から埋土下位に流水痕跡が認められる。南溝と東溝が園池跡と接続する箇所には、滝石組1・2が配置される。また北溝と園池跡の接続部は小礫を利用した州浜の意匠を施してあり、園池跡内東側と西側に分岐する。西溝は、園池跡との接続部周辺に滝石組等の意匠は確認できず、さらに館外郭の大溝と接することから、その主機能は排水施設として利用した可能性が高いと考えられる。

その他、庭園の構成要素としては、園池跡の南西部及び北東部には不定形土坑や溝状遺構が確認され、その形状の特徴等から植栽痕と推測されている。さらに園池跡南側は、当該期の遺構は、ほとんど皆無であることから削平を受けたと考えられ、築山などの存在が想定される。その他、井戸跡等が、園池跡北側に展開する。

当該期庭園の鑑賞方法は、園池跡内や周辺に通路跡や橋の痕跡等は検出されていないため、主には回遊式庭園よりも、座観式庭園の可能性が高い。座観式庭園と考えた場合、園池跡の構造が東側と西側で大きく異なることから、鑑賞地点は複数あった可能性が高い。庭園に関連する建物跡は明確には検出できていないが、園池跡北側で建物に伴うと推定される整地痕が確認できており、鑑賞地点の1つと考えられる。

表 3-9 庭園域の検出遺構と成果（平成 27 年 11 月末現在）

種別	内 容	調査成果	備 考	
園池の構造	概要	全体形状・規模・土層堆積状況	東西 67m×南北 30m（溝は除く）	
		斜面（岸部）の状況	南斜面：石貼り箇所は確認できない。 北斜面：石貼り箇所あり。場所により礫の大きさに違いあり（北溝接続部付近は拳大強、中島 2 北側は人頭大の大きさ）。	斜面スロープは人工的な整地によって形成される。
	護岸	護岸状況（護岸石・石積み等）	東側：直径 1m 以上の護岸石（景石）を多用しており、その間には小礫を貼っていたと考えられる。 西側：東と違い、ほとんどない。一部州浜にして護岸を形成。その他、粘土貼り付けのみの工法。	
		州浜の分布と構造	州浜は北斜面にあり。南斜面はほとんどなし。	南溝より北西部にある景石付近に拳大の石のまとまりがある。
	池底	池底の構造	東側：ほとんど粘土のみ。 西側：粘土及び粘土上に拳大礫を貼り付け。川原石と緑泥片岩あり。	粘土層は園池全体に分布する。
			中島の形状・規模・構造	中島 1：東西 15m×南北 12.5m（下端で計測） 中島 2：東西 4m×南北 7.5m（下端で計測）
	中島	中島周囲の護岸状況	中島 1 の北側、中島 2 の東側にあり。拳大状の礫を貼り付け。中島 2 東側のみ、1 cm ほどの小石を貼り付け。	
		中島上の施設	中島 1・2 ともに不明。但し、中島 1 には館 VI 期段階に、破碎された景石があり、館 V 期段階は景石などが設置されていた可能性は高い。中島 2 にも直径約 0.5m の景石あり。	
	水張	水位	東側：護岸石組箇所を考慮すると 2.6～2.65m を推定。 西側：池底石や景石 A、水分石を考慮した場合、2.4～2.5m が妥当。	2.7m を超える水位を想定した場合、東側は景石等が 0.4m 程度しか水面から表出しない。西側では、景石 A 周辺・水分石等の景観が悪くなる。
			水利施設	導水施設
	排水施設	西側に延びる溝。館外郭の溝と接続。また上記の導水溝と園池の接続部には意匠を施しているが、西溝は何もしていない。ただ、恒常的な排水ではなく、大雨時などの臨時的排水施設。		
	景石	景石の分布状況	東側は景石を多用しているが、西側は局所のみ利用。	中島 1 の北東部に 3 基ないし 4 基配列する景石があり。夜泊石の可能性もある。また、北側護岸部には天端が平らな拝石と推定されるものもある。
		据付方法	池底に粘土を貼り付ける際に設置する。裏込めにも粘土を入れ固定する。	
		滝石組	東溝と南溝の園池接続部に設置。	東側は 1m 以上の巨石を使用し、池底に向かってなだらかな段を形成する。南側は東と比較し、質素な感をもつ。

種別	内 容		調査成果	備 考
園池の構造	景石	石材及び産地の同定	安山岩（輝石安山岩・角閃石安山岩）、凝灰岩（永興石含む）。産地は大分川中上流域沿いの山地。	
		抜き取りプランの有無	中島1北西側に1箇所あり。	
庭園全体の様相	地割	地形	館南東部の推定標高4.0mほど。中心建物跡周辺よりも約0.8m低いと推定。	
		陸地の化粧（芝はり等）	園池周辺から玉砂利が多数出土する。化粧として使用したと考えられる。	
	空間利用	玉砂利の分布	園池全体的に入る。集中箇所などは認められない。	
		植栽について	東側護岸石組内にて、植栽を示す花粉・種子分析結果が得られている。	
		築山	痕跡はないが、園池南側の遺構がない空閑地に築山が想定される。	
土器廃棄等の有無・分布等	館Ⅲ期・Ⅳ期庭園には一括廃棄痕跡あり。館Ⅴ期は構築時の粘土中に京都系土師器皿完形が数箇所出土しており、構築時の祭祀と推定される。	北溝と園池の接続付近に土器廃棄の分布が認められる。		
庭園関連施設	鑑賞	V期庭園の鑑賞位置	園池西側の北側に掘りこみ地業跡あり。東側は不明。	中島1の規模・形状等からその上面にも施設があった可能性もある。
		鑑賞方法	座観式主体。	
	付属施設	井戸跡	園池北東側に1基あり。	園池北東部の館12SE029より和鏡が出土している。館16次の集石遺構も井戸関連遺構の可能性あり。
		その他施設等	植栽痕。 柵④ 園池跡北側の建物跡と推定される整地痕	植栽痕と推定される遺構は園池北東部・南西部付近で認められる。柵④は北東部の植栽痕と関連する可能性あり。
その他	以後のV期庭園の様子	改修・造り替え等	館Ⅵ期は、部分的に埋め戻され、溜池として利用される。その後全体を埋め、水田化する。	水田化については、周辺の環境より17世紀中頃前後が想定される。
		改修・造り替え等	館Ⅵ期は、部分的に溜池として利用され、館Ⅴ期より平面積は狭い。景石は意図的に割られているものあり。	

中心建物域：16世紀後半である館Ⅴ期の中心建物域の遺構は、主殿と考えられる中心建物（礎石建物）跡2棟が確認された。礎石は残存していなかったが、根石は残存しており、その遺構の分布から平面プランを検討した。礎石は近接の井戸跡の井筒部から廃棄された状況で出土しており、その規模等から中心建物で使用されたと推定される。

中心建物跡周辺では、礎石等が残存するピット等の遺構で構成され、規模が明瞭な礎石建物跡が3棟（礎石建物跡3・4・5・6）、礎石などが残存するが規模が明瞭でない礎石建物跡が2棟（礎石建物跡



中心建物域の位置

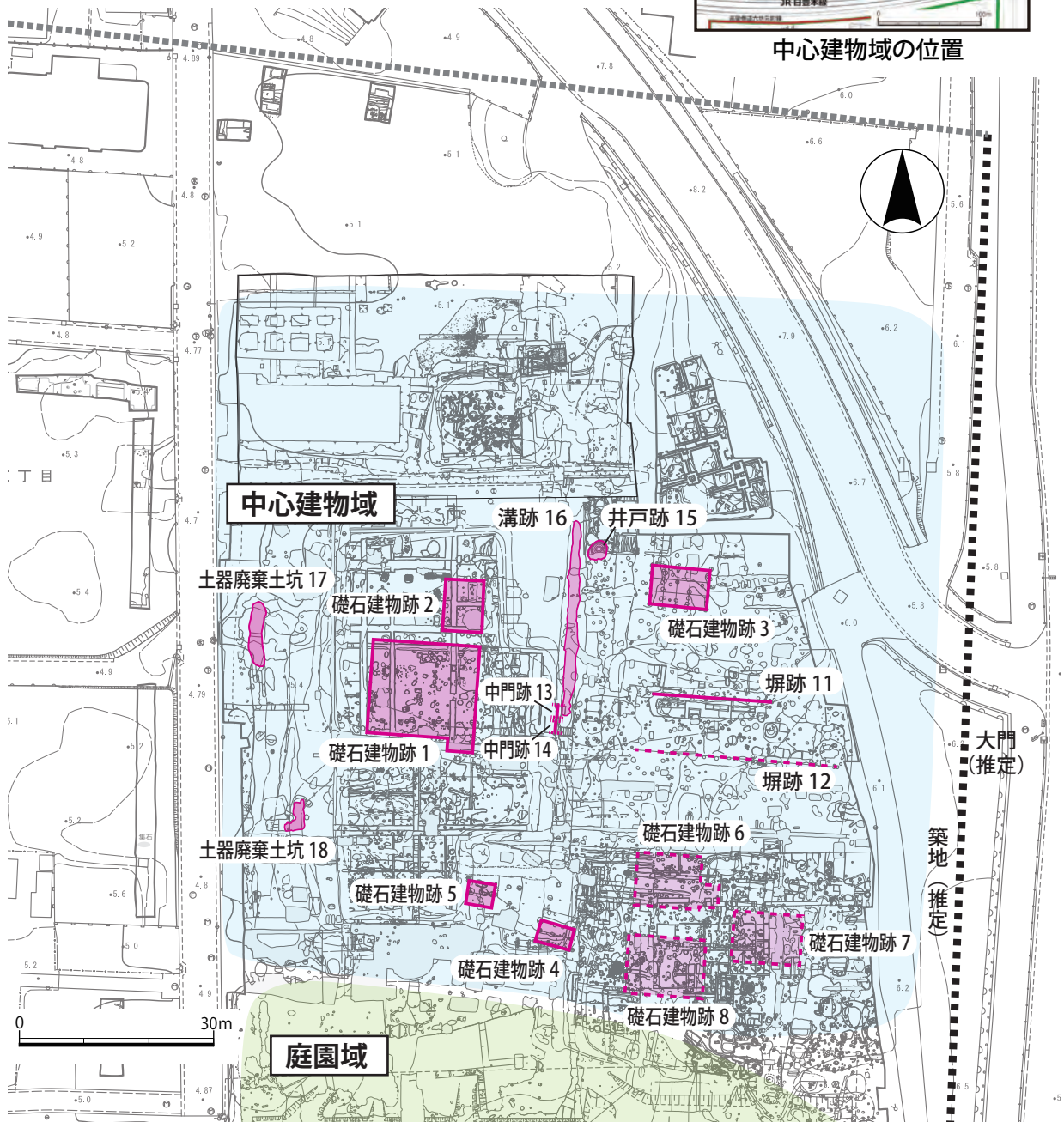


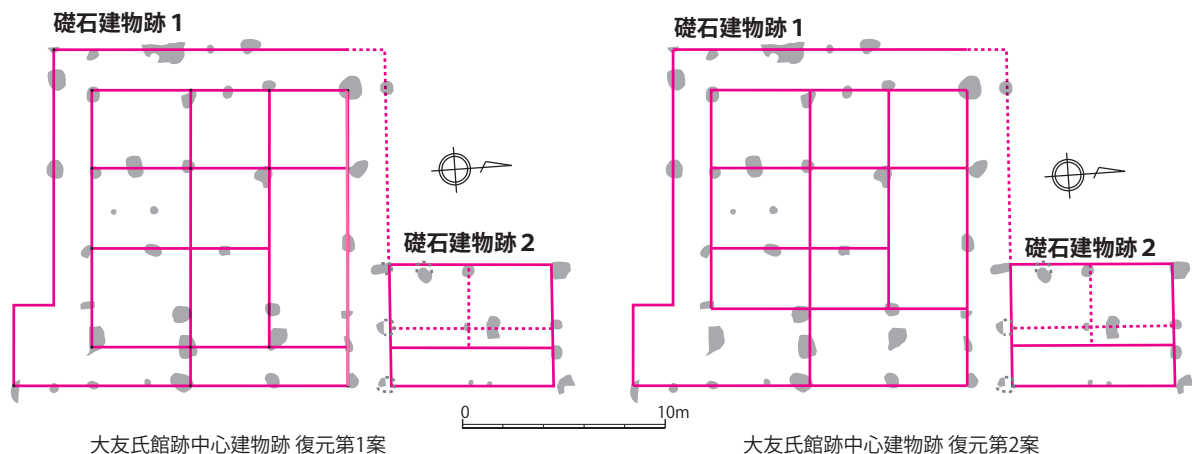
図 3-4 中心建物域と主要遺構

7・8)、中心建物跡北側では、礎石は残存しないが掘り込み整地に伴う建物跡と推定される礎石建物跡が1棟、掘り込み整地や礎石なども確認されない空地があり、周囲にかわらけ一括廃棄土坑などが点在するため、建物の存在の可能性があるものが確認されている。また、中心建物跡南側に掘り込み整地が展開するが礎石は確認されていない。ただし「とうけねんちゆうさほうにつき當家年中作法日記」によると中心建物跡南側には舞台などが想定される空間が考えられる。

その他、中心建物跡の東側を南北方向に延びる区画溝1条や、井戸跡1基、塀の控え柱と考えられる柱穴列2条、かわらけ一括廃棄土坑10基以上、黒色や白色の砂利敷き遺構などが確認された。

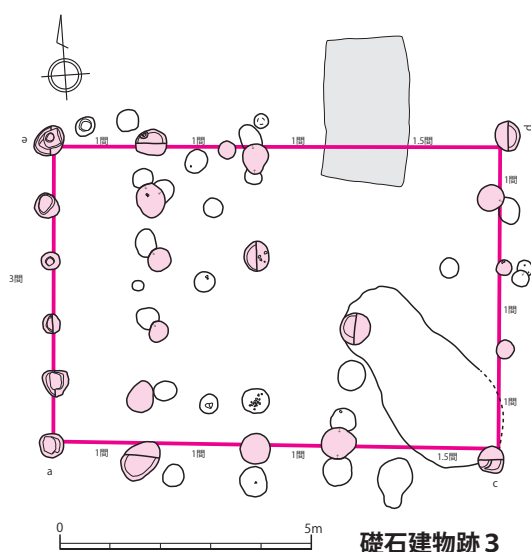
遺構名	礎石建物跡1 (中心建物 南側 36S B300)		
遺跡検出レベル	検出標高 5.14m	当時の推定レベル	標高 5.3m(礎石上で 5.4m)
遺構の時期	館V期：16世紀後半	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	東西：東から6尺5寸の1間、2間半、2間、2間、1間の8間半。 南北：南から6尺5寸の1間、2間半、2間、2間、(1間)の最大8間半。南東に東西と南北1間ずつ追加され、2間×2間の出が確認される。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石自体は検出されておらず、礎石を安定させるための根石を確認。 ・当建物跡の北東20mの箇所にある同時期の井戸跡から幅約1mの安山岩の自然石を使用した礎石が出土しており、礎石規模から当建物跡1や礎石建物跡2に使用されたと考えられる。 ・当建物跡は遺構状況やその規模、検出レベルからすると『當家年中作法日記』に記載されている「大おもて」と考えられ、「御前」や「次の間」の記述がある。 ・周囲に幅1間の広縁が付くと考えられる。 ・規模から推定する部屋列は東西及び南北とも3列構成となる。 ・落縁(濡縁)は東面や南面には取り付くものと推定。調査によると少なからず近世以後の削平を受けている。また落縁を支える束柱の痕跡は確認されないが、他事例などによると建物本体のそれよりも加重の関係より小さいものと考えられ、近世以後の削平により消失したと考えられる。また時期は古くなるが、16世紀最初の大工の木割書である『木碎之注文』によれば、主たる建物には落縁が付いており、16世紀後半の主たる建物にも付されている可能性が高い。 		

遺構名	礎石建物跡2 (中心建物 北側 36S B400)		
遺跡検出レベル	検出標高 5.14m	当時の推定レベル	標高 5.3m(礎石上で 5.4m)
遺構の時期	館V期：16世紀後半	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	東西：東から6尺5寸の1間、2間の3間、もしくは1間半、1間半の3間。 南北：南から6尺5寸の2間、2間の4間。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石は検出されておらず、礎石を安定させるための根石を確認。 ・礎石建物跡1と同じく、付近の井戸跡から出土した礎石が当建物跡に使用されていた可能性が考えられる。 ・東面に幅1間の広縁が付くことが考えられ、礎石建物跡1の東側広縁の直線上にあたる。 ・礎石建物跡1との間隔はちょうど1間である。 ・部屋は西側に南北1列と想定される。 ・礎石建物跡1とセットで「大おもて」の可能性が考えられる。 ・『匠明』の「昔六間七間ノ主殿之図」と比較すると、当建物跡は「色代」などの性格が考えられる。 		

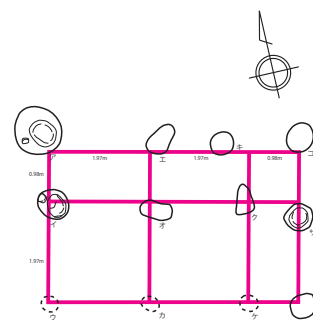


遺構名	礎石建物跡3 (36S B145)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.6m 残存する礎石の上面標高 4.65m	当時の推定レベル	標高約 4.6m(礎石上で 4.65m)
遺構の時期	館V期：16世紀後半	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	東西：東から6尺5寸の1間半、1間、1間 1間の4間半。 南北：礎石が良好に残存する西側列で、南から幅約4尺の等間隔に礎石が6つ並び、全長で約20尺の3間となる。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石は南北の西側列で検出されたが、その他は礎石が抜き取られ、掘り方のみ確認した。なお、建物跡内の北東側は近世以後の削平で周辺よりやや深いところに検出面があるため、掘り方の残存状況もよくない。 ・この建物跡に接するように、西側南北列を北側直線上に礎石状の石を含む遺構が並び、その4尺東にも平行するように丸礫を含む遺構が並ぶ。さらに西側南北列南から2つ目の礎石から西側に向かって、間隔は一定ではないが、東西直線上に礎石状の石が確認される。これらは当建物に付く渡廊や塀などの施設と考えられる。 ・当建物は中心建物跡の東側にあたり、また周辺に建物等は隣接せず、黒色や灰色の砂利敷き空間であった。性格は不明であるが、厩や『當家年中作法日記』に記述されている「遠侍」などの施設が想定される。 		

遺構名	礎石建物跡4 (33S B010)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.8m 残存する礎石の上面標高 4.95m	当時の推定レベル	標高 4.8m(礎石上で 4.95m)
遺構の時期	館V期：16世紀後半	主軸方位	N-12°-E
遺構の規模	東西：東から6尺5寸の1間、2間の3間、もしくは1間半、1間半の3間。 南北：南から6尺5寸の2間、2間の4間。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石は西側南北列で2カ所、東側南北列で1カ所検出。そのほかは、礎石はなくなっていたが、掘り方を検出。また建物跡の南側東西列の西の3つは、近世の削平を受けており、掘り方も検出されなかったが、南東側に1基残存しているため、ここを最南側東西列と判断した。 ・建物の性格は不明であるが、西側の礎石建物跡5に近く、また園池の北溝の北側に近接するため、これら施設との関連が考えられる。 		



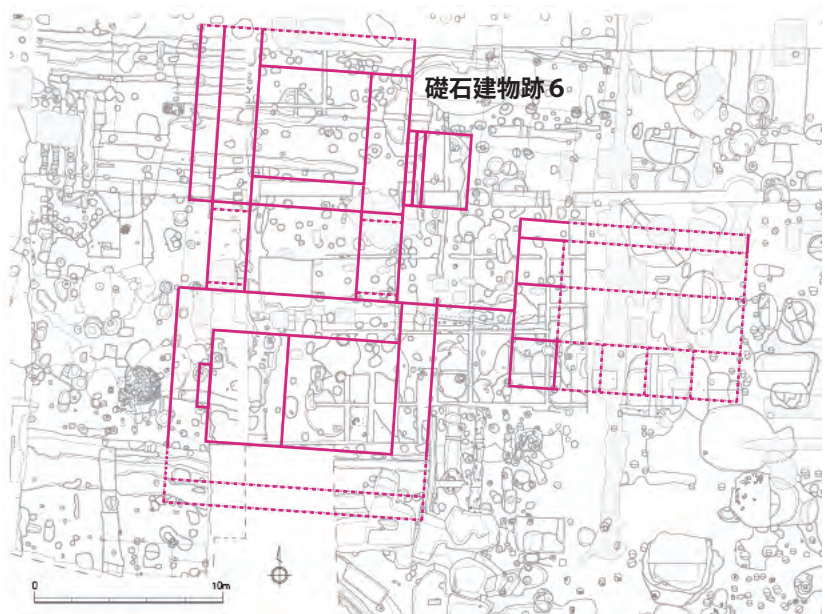
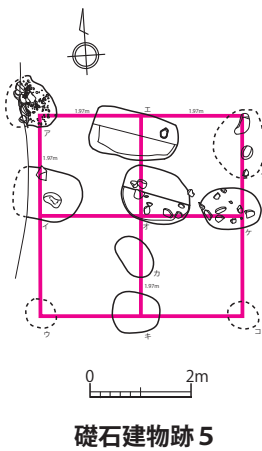
礎石建物跡3



礎石建物跡4

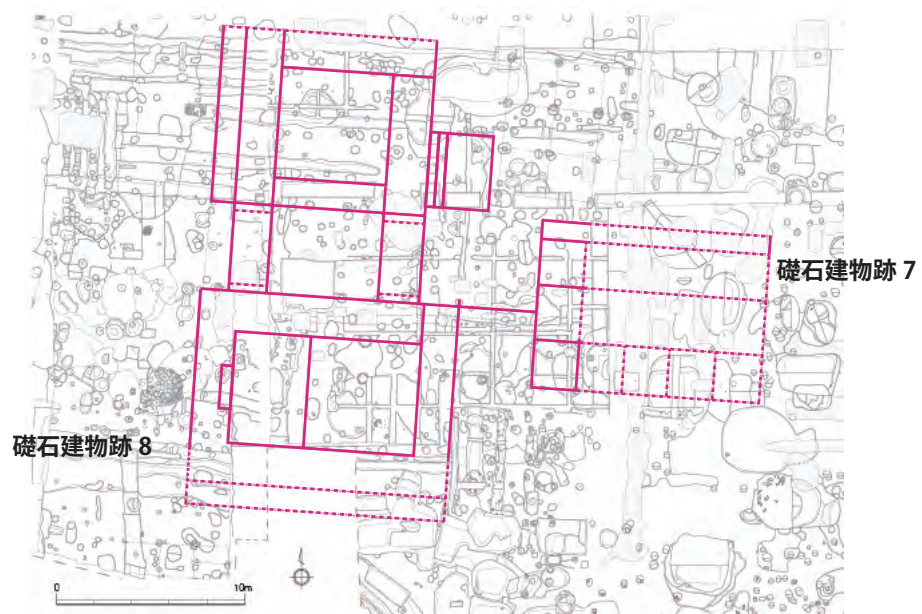
遺構名	礎石建物跡 5 (33 S B044)		
遺跡検出レベル	検出標高 5.0m	当時の推定レベル	標高約 5.1m(推定礎石上で 5.2m)
遺構の時期	館Ⅴ期：16世紀後半	主軸方位	N-4° ± -E (礎石痕が大きく、東に振る可能性あり)
遺構の規模	東西：東から 6 尺 5 寸の 1 間、1 間の 2 間。 南北：南から 6 尺 5 寸の 1 間、1 間の 2 間。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石は残存していないが、掘り方は一部で残り、根石を含むため、礎石痕と考えられる。南東と南西は近世以後の削平を受けているため、礎石を設置するための掘り方は残存していない。また北東の礎石痕は掘り方は明確ではなかったが、拳大礫が集中する箇所が見受けられたため、ここを北東隅とした。 ・礎石設置のための掘り方の規模等から、礎石建物跡 1 や礎石建物跡 2 と類似する構造と考えられる。 ・建物規模は 2 間 × 2 間であるが、中心建物跡である礎石建物跡 1 の約 30m 南東に位置しており、中心建物跡との関連、もしくは礎石建物跡 4 との関連を考慮しておく必要がある。 		

遺構名	礎石建物跡 6		
遺跡検出レベル	検出標高 4.8m	当時の推定レベル	標高約 4.9 m(推定礎石上で 5.1 m)
遺構の時期	館Ⅴ期：16世紀後半	主軸方位	N-4° -E
遺構の規模	東西：東から 6 尺 5 寸の 3 間。 南北：南から 6 尺 5 寸の 3 間。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石は人頭大の丸礫を使用するが、全ての礎石は残存せず、一部は抜き取り痕のみの場合や、攪乱などで削平をうけ全く確認できない箇所もある。 ・部屋と考えられる規模は東西、南北方向ともに、6 尺 5 寸の 3 間の正方形と推定され、その周囲には 5 尺～7 尺幅の縁が付き、東側には突出する箇所があり、式台などが考えられる。 		



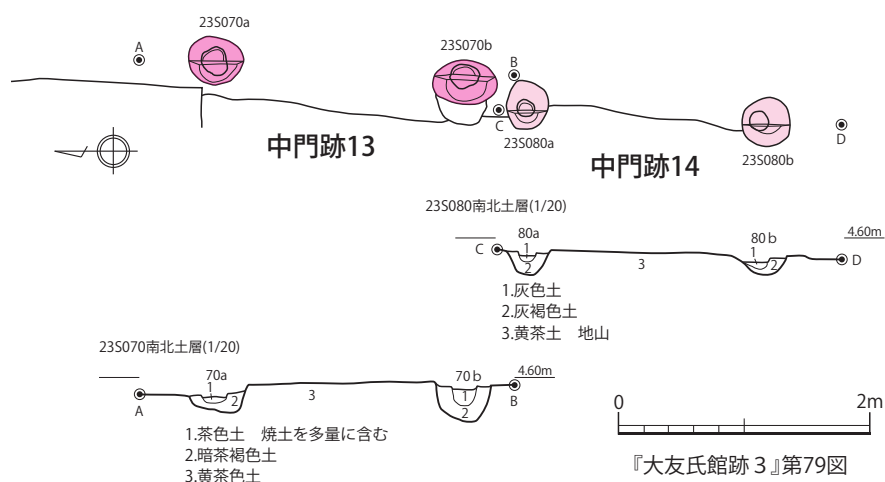
遺構名	礎石建物跡 7		
遺跡検出レベル	検出標高 4.8 m	当時の推定レベル	標高約 4.9 m (推定礎石上で 5.1 m)
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀後半	主軸方位	N - 4° - E
遺構の規模	東西：西から 8 尺 1 間、それから西側は不明。 南北：南から 8 尺 5 寸の 1 間、9 尺 5 寸の 1 間、8 尺の 1 間、3 尺となる。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石は人頭大の丸礫を使用する。礎石や抜き取り痕は西側で比較的多く残存しているが、東側は近世水田の影響により削平をうけ、確認できない。 ・この建物跡は、他と違い、1 間の幅が 6 尺 5 寸を基準にしていない。 ・1 間幅がこの時期の基準尺よりも広いため、厩など、特殊な性格の建物が考えられる。 		

遺構名	礎石建物跡 8		
遺跡検出レベル	検出標高 4.8m	当時の推定レベル	標高約 4.9 m (推定礎石上で 5.1 m)
遺構の時期	館Ⅴ期：16 世紀後半	主軸方位	N - 4° - E
遺構の規模	東西：西から 7 尺の 1 間、6 尺 5 寸の 5 間、6 尺の 1 間となる。 南北：北から 7 尺の 1 間、6 尺の 1 間、7 尺 5 寸の 1 間、+ α で南限は不明。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・礎石は人頭大の丸礫を使用する。礎石やその抜き取り痕は北側で比較的多く残存しているが、南側は近世水田の影響により削平をうけ、確認できない。 ・この建物跡の推定部屋の規模は、東西が 6 尺 5 寸の 5 間、南北は 1 9 尺 5 寸と考えられる。 ・部屋の周囲には幅 6 尺～7 尺の縁が取り付くと考えられる。 		



遺構名	中門跡13 (23SA070)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.5m	当時の推定レベル	標高約 4.7m
遺構の時期	館Ⅴ期：16世紀（重複関係より）	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	ピット2基：掘立柱で、柱穴の直径0.4m、最深部標高4.0m		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・柱穴間隔は1.97m(6尺5寸)。 ・東側に近接する南北溝16と平行する。 ・柱穴2基1対の門などの施設と考えられる。 ・柱穴の南北方向の延長線上には連続する柱穴は検出できなかったが、南北溝西側ラインに平行するように、根太構造の塀等が中門から連続して南北に延びていたと考えられる。 ・中門跡14も類似遺構であるが、南北溝16が掘り返しなどで複数時期あることから、中門13・14は同時存在ではなく、時期差があると思われる。 		

遺構名	中門跡14 (23SA080)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.5m	当時の推定レベル	標高約 4.7m
遺構の時期	館Ⅴ期：16世紀（重複関係より）	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	ピット2基：掘立柱で、柱穴の直径0.4m、最深部標高4.0m		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・柱穴間隔は1.97m(6尺5寸)。 ・東側に近接する南北溝16と平行する。 ・柱穴2基1対の門の施設と考えられる。 ・柱穴の南北方向の延長線上には連続する柱穴は検出できなかったが、南北溝西側ラインに平行するように、根太構造の塀等が中門から連続して南北に延びていたことも考えられる。 ・中門跡13も近接して見つかった類似遺構であるが、南北溝16が掘り返しなどで複数時期あることから、中門13・14は同時存在ではなく、時期差があると思われる。 		



遺構名	堀跡 1 1 (23SA110)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.5m	当時の推定レベル	標高約 4.6m
遺構の時期	館V期：16世紀（重複関係より）	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	ピット9基：西より約3m(10尺)間隔で配置。ただし、西から4つ目と5つ目の間隔は6mとなり、6つ目と7つ目の間隔は1.97m(6尺5寸)となる。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・柱穴間隔は10尺を基本とする。 ・1.97m(6尺5寸)間隔の箇所は、出入り口の可能性あり。 ・柱穴は堀の本体の主柱である可能性と堀を支えるための控え柱の可能性あり。 ・南約9.5mの堀跡12(36SA128)の堀と平行であり、同時存在した可能性あり。 ・西側の端は不明であるが、他の遺構との関係から溝跡16(36SD025)の東端付近で止まる可能性あり。東端は不明。 ・この堀の北側では黒・灰色の砂利敷き遺構が確認される。また南側は近世以後の削平により残存状況はよくないが、16世紀以降の遺構からは白玉砂利が多く出土しているため、白玉砂利敷きの空間だった可能性が高い。 		

遺構名	堀跡 1 2 (36SA128)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.6m	当時の推定レベル	標高約 4.7m
遺構の時期	館V期：16世紀（重複関係より）	主軸方位	N-4°-E
遺構の規模	東西：東から6尺5寸の1間、2間の3間、もしくは1間半、1間半の3間。 南北：南から6尺5寸の2間、2間の4間。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・柱穴間隔は10尺を基本とする。 ・柱穴は堀の本体の主柱である可能性と堀を支えるための控え柱の可能性あり。 ・人頭大の円礫を含む遺構は、堀構造と一体となった出入り口などの可能性あり。 ・北約9.5mにある堀跡11(23SA110)と平行であり、同時存在した可能性あり。 ・西側の端は不明であるが、他の遺構との関係から溝跡16(36SD025)の東端付近で止まる可能性あり。東端は不明。 ・この堀の南側では黒・灰色の砂利敷き遺構が確認される。また北側は近世以後の削平等により残存状況はよくないが、16世紀末以降の遺構からは白玉砂利が多く出土しているため、白玉砂利敷きの空間だった可能性が高い。 		

遺構名	井戸跡 15 (15SE018)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.4m	当時の推定レベル	標高約 4.7m
遺構の時期	館Ⅴ期：16世紀後半	主軸方位	—
遺構の規模	平面プラン：円形 規模：掘り方直径約 3.4m、井筒直径約 0.7m、底部標高 1.9m		
内 容	・井筒部下層より、礎石が3石出土しており、中心建物との関連が推定される。		



井戸跡15断面

遺構名	溝跡 16 (36SD025)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.7m	当時の推定レベル	溝の東側：標高 4.7 m 溝の西側：標高 5.0 m
遺構の時期	館Ⅴ期：16世紀後半	主軸方位	N - 4° - E
遺構の規模	ピット 2 基：掘立柱で、柱穴の直径 0.4m、最深部標高 4.0m		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・中心建物と東側の空間を区画する溝である。 ・周辺の復元標高から、溝の西側の復元標高は高く、東側は低い。溝を境に段差が付く。 ・溝の掘り方西側ラインに平行して、門跡 13・14 の柱穴が確認されており、その直線延長上には確認されないため、根太構造の塀などの遮蔽物が展開した可能性がある。 		



溝跡16(北西から)

遺構名	土器廃棄土坑 17 (36SK120)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.0m	当時の推定レベル	標高約 5.0m
遺構の時期	館Ⅴ期：16世紀後半	主軸方位	—
遺構の規模	南北にのびる長土坑で、南北 10m、東西 1.8m、最深部標高 3.45mである。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・土器の大量廃棄土坑は、京都系土師器主体の土坑に限っても、中心建物域から多く検出される。 ・当遺構は中心建物跡の西側で検出され、中心建物側から廃棄された状況が考えられる。 ・このような土坑のあり方は、中心建物で行われた饗宴などで使用された土器を一括廃棄したものと考えられる。 ・中心建物跡北側の類似遺構の土壌を自然科学分析を行うと、魚の歯（タイ科）や二枚貝などが検出され、当時の献立を考える上でも重要である。 		



土器廃棄土坑17断面

遺構名	土器廃棄土坑 18 (26SK011)		
遺跡検出レベル	検出標高 4.1m	当時の推定レベル	標高約 5.0m
遺構の時期	館Ⅳ～Ⅴ期：16世紀後半	主軸方位	—
遺構の規模	土坑は不定形状で、南北 4.6m、東西 13.1mである。		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・土坑内からは、大量の京都系土師器のなかに金箔貼りのものが2破片含まれていた。 ・26SK011 は中心建物跡の南西側の近接した場所で検出され、中心建物と関連すると推定される。 ・このような土坑のあり方は、中心建物で行われた饗宴などで使用された土器を一括廃棄したものと考えられる。 		



土器廃棄土坑18調査状況

③文献史料からみた大友館と年中行事

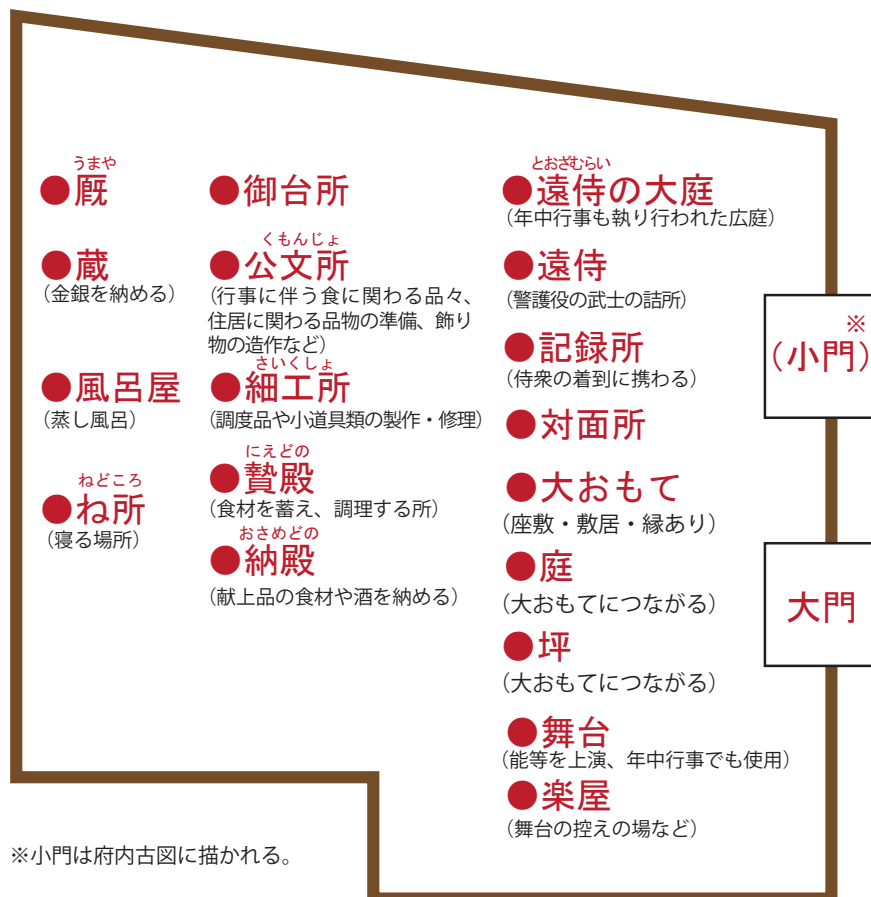
大友義統が書き記した大友家の年中行事記録である「當家年中作法日記」（以下、「作法日記」という）には、大友館でおこなわれた年中行事や館に勤務する人々の様子、建物等が記されている。

建物等については、多くの武士が列席し儀式と会食を行った「大おもて」という大きな建物があり、その周囲には「坪」や「庭」、能や猿楽などを演じる「舞台」や「楽屋」、「遠侍」の建物や「遠侍の大庭」が存在したようである。その他、金銀が納められた「蔵」や「記録所」、「対面所」、「御台所」、「公文所」、「細工所」、「ね所」や「風呂屋」、「厩」などの施設、そして館の正門と考えられる「大門」が確認できる。

以上の施設のすべてが独立した建物もしくは同一建物の中にあるのか、判断は難しいが、大友館には図 3-5 のような施設が存在していた可能性が高い。記載のない施設を含めるとさらに多くの建物が想定される。

さらに表 3-10 に示すように、室町将軍家と類似する年中行事が大友館内で多く執り行われていたことがわかる。

例えば、正月 14 日には「花のをこない」という行事が行われ、この日の夕方、



※小門は府内古図に描かれる。

本図中に記載された各施設の位置関係は、事実を正確に反映したものではない。施設の中に「よろひ門」があるが、場所ははっきりしない。また、大おもての座敷の中には、「御前」・「次の間」と呼ばれる座敷が二間続きであったようである。

図 3-5 「當家年中作法日記」にみえる大友館の諸施設

由原宮から大友館に花が届けられ、大門をとおり、遠侍の大庭で儀式が行われた。行事が終わると、花は対面所でほどき、宿老などに遣わし、鎧門や建物の室内、厩や贄殿に飾り付けたとされる。正月 29 日には多くの家臣を招いての「大表節」があり、ここでは中心建物のおもてから遠侍までの中心建物域の施設を使用して宴会が行われ、舞台では能も演じられた。また宴会等で使用されたかわらけは再利用せず、それぞれ建物の周辺に捨てられた状況が発掘調査で確認されている。

このように、作法日記には、建物や行事の詳細内容まで記述しているものが多い。また発掘調査で確認された遺構や遺物が作法日記の記述と合致する箇所も認められる。

一方で、館南東部の発掘調査で見つかった池庭については「作法日記」には記されていないことから、「作法日記」に記された諸施設以外にも、少なからず他の施設が存在が指摘される。言い換えると、公式行事を「作法日記」に記載された建物や空間を中心に行ったとするならば、池庭などの施設は非公式の場とも推定される。

表 3-10 室町將軍家と大友家における主な年中行事

月 日	年中恒例記	大友家年中作法日記
正月朔日	・御対面 ・内儀にて、七献参る ・御こきのこと、台にすはる也、光雲寺進上日失念なり ・ 椀飯出仕これあり未刻、管領椀飯出仕は応仁以前の こと也	・大歳の夜に正月祝を飾る ・梅干茶、参る ・正月祝と正月膳組参る ・三が日も松囃子、参る ・千秋万歳、参上す ・対面儀式 ・ 椀飯振舞 ・直入郷椀飯調進 ・謡始
正月2日	・御対面以後、年始乗馬始 ・椀飯出仕未刻、土岐 ・御取始	・祝次第 ・馬乗始 ・船乗始 ・緒方荘椀飯調進 ・対面盃次第
正月3日	・御対面並びに御盃、二日に同じ ・椀飯出仕、佐々木、京極、六角、隔年也 ・「定例記」[赤の日 御供衆出仕もなし]	・赤口、対面なし ・高田荘椀飯調進
正月4日	・赤後の出仕は、毎月此分也 ・三間の厩において、御うたひその ・御祝御湯参り(御風呂始)	・福入参る ・諸寺家対面 ・風呂始 ・一府地下人対面
正月5日	・御対面 ・関東衆、出仕	・簾中へ参上
正月6日	・御対面、並びに御盃等の儀、三ケ日に同じ ・御菓、外郎進上 ・吉書御内書、細川殿へ遣わさる ・千秋万歳、参る ・椀飯出仕赤松、乗馬同前 ・御みそうつ、御土器に入りて参る ・ちふろう餅、進上	・鬼の豆、方違 ・由布院衆対面 ・七日正月祝 ・ 笠和郷椀飯調進 ・蘇民将来参る ・白馬参る
正月8日	・御対面 ・評定衆、出仕	・肩衣袴着用 ・不涯衆、無足衆、小寺衆対面
正月9日		・赤口、対面なし
正月10日	・御対面 ・御参内	
正月11日	・御対面 ・御評定御沙汰始、管領以下出仕、但し応仁乱以前の 儀也 ・御祈始 ・御普請始、次に御作事始	・吉書儀式 ・斧立 ・円寿寺衆対面 ・一種一瓶進上 ・弓始 ・御門素襖献上
正月12日	・御対面	・山香郷衆、浦部衆対面
正月13日	・右書に、十三日より晦日までの事もれたり	・蔭山へ行初
正月14日	・「定例記」[いにしえは松ぼやしあり]	・由原宮より花参る ・粥参る
正月15日	・「定例記」[御対面御祝の次に御かゆ参る] ・「定例記」[椀飯、山名殿]	・小正月祝 ・山香郷椀飯調進
正月16日		・評定始 ・泉酢進上 ・金剛宝戒寺衆対面
正月17日	・「定例記」[御弓始]	
正月19日		・簾中方節
正月20日		・犬追物 南北衆対面
正月27日		・実相寺での振舞
正月29日		・大表節
正月末		・国之衆参上
2月朔日	・御対面 ・白鳥一、慶斗鮑千本、天野五荷、畠山殿進上 ・千疋宛折紙、三職をはじめとして、諸大名、その外、 国持たる方に進上 ・今月初卯、同二十五日、御発句 ・当月初牛に、節分の大豆を取り置きて参るなり	
2月15日	・殿中において、遺教経これあり	
2月17日	・御沙汰始	
3月朔日	・同前、月次御祈これあり	
3月3日	・雑合これあり ・御祝の時、御酒に桃花入れ申し候なり ・「定例記」[内々の御祝の次に蓬餅まいる]	・上巳の節句(桃の酒) ・宇目村椀飯として猪とふつ餅(蓬餅)調進 ・磯遊
3月10日		・このころから端午の節句前まで狩
4月朔日	・今日より、五月五日まで袷を着すなり ・今月中、吉日に御蚊帳つり始めらる也 ・月次御祈これあり	
4月	・中の申日、鴨社務より葵桂進上	

月 日	年中恒例記	大友家年中作法日記
4月8日	・等持寺より、釈迦像参りて、御湯をそとめさせらる也	
5月朔日	・御祝の御酒に菖蒲をきさみて入れるなり	
5月3日	・「定例記」[晝、御殿の軒に菖蒲に蓬をそえてふき申す]	
5月4日	・蓬、菖蒲、御殿にふかる ・初瓜進上 ・御甲の菖蒲、檜皮師進上	・館の軒にふつと菖蒲を茸く
5月5日	・今日より帷子なり、但し女中衆は袷なり ・御祝御湯参る、御湯に先夜しない候蓬、菖蒲入れるなり	・端午の節句 ・緒方荘椀飯調進
6月7日	・今日、氷堅餅まいる ・女中衆、かたびらを着用す	
6月7日	・京極方へ渡御御祇園会御見物以後、これあり	
6月9日		・獅子舞参る
6月12日		・祇園会の慣し
6月15日		・祇園社社参、祇園会見物
6月28日		・大祓
6月晦日	・夜、伝奏伺候て、御輪に入られ申し、麻の葉を左の御手にもたれ候て御むしろの上にて三度、輪に入られ申し候也	
7月7日	・梶葉に七夕の歌を、七首あそばさるなり ・梶葉に歌をあそばされて後、梶皮・そうめんにて、竹に付けて御屋根へ上げらる ・「定例記」[常徳院殿(9代義尚)御時は、笠懸、犬追物、御歌、御連歌、御鞠、揚弓、御酒以下七種の御あそび御座候時も御入り候]	・七夕 ・七種の遊び ・梶の葉に素麵を取りのせる ・諸寺家花の台進上 ・虫振い
7月8日		・生見の祝
7月11日	・御生見玉の一献、これあり	
7月12日		・大風流(同26日も)
7月14日	・禁裏様へ、昼時分、御灯笼御進上 ・「定例記」[鹿苑院(3代義満)へ御焼香に御成、普広院(9代義教)へ同じ]	・先祖供養(同15日も)
8月朔日	・御たのむ(八朔) ・女中衆、あわせ着用なりむかしは、今日より九月八日まであわせ也	・八朔儀式
8月2日	・御たのむ、今日まで也	
8月8日		・秋裕
8月14日		・由原宮放生会(同15日も)
8月15日	・明月御祝参る内儀において也	・名月祝
9月1日	・今日より九日まであわせ也	
9月8日	・今夕、菊を御庭にうえ申す也、今夜、菊に五色のわたをきせらる也	
9月9日	・今日より小袖なり ・御祝御酒に菊花入れ申す	・重陽の節句(菊酒)
9月13日	・明月御祝参る、内儀において也	・十三夜祝
10月朔日	・御火鉢を置かれ候御障子を立てられ候	
10月5日	・北野御経へ渡御	
10月亥の日	・今月亥日ごとに、御嚴重、各拝領	・亥の子 ・笠和郷椀飯調進
12月朔日	・御対面所にて参三献 ・御すす御なてそめの事	
12月13日		・評定納
12月26日	・御立松、つくり申し候也	
12月27日	・市馬(貢馬)とて、禁裏へ御馬進上の儀式、これあり ・すすはき、これあり内儀において、御祝、参る	・煤払
12月28日		・日常道具新調
12月晦日	・御対面 ・禁裏様へ御服料百貫、進上 ・節分事御祝、参る	・年末勘定

※大友家と将軍家で内容も実施日も同じ-----赤字

※内容は一致するものの、実施日が異なる----青字

(大友館研究会 2017『大友館と府内の研究「大友家年中作法日記」を読む』東京堂出版より抜粋)

④ 調査の課題

- ・ 館全体の空間構造の解明
- ・ 検出された遺構と文献史料で知られる施設の位置づけ
- ・ 館の大門・小門等、出入口の確認

(2) 唐人町跡

唐人町とは、大友館北東隅より北側に比定される南北道路沿いの町である。

天正14年(1586)の島津軍の豊後侵攻までは、南北道路西側のみの片側町(以下、片側町段階)であり、島津侵攻後の復興の段階で両側町(以下、両側町段階)になったことが判明している。その後、慶長7年(1602)頃の城下町移転政策により、近世府内城・城下町へ移住したと考えられる。文献史料には「唐人町」に外国人が居住していたことが知られており、発掘調査からも町屋遺構とともに外国人の生活文化を示す国際色豊かな遺物が確認されている。

全国の城下町に点在する「唐人町」の中でも当主の館に隣接する事例は稀であり、貿易等を通じた大友氏との密接な関係が想定されるとともに、大友氏遺跡の「南蛮文化発祥の地」「国際貿易都市遺跡」としての本質的価値を具現化した遺跡である。

①発掘調査の経過

館東側前面の南北道路西側で1地点、東側で4地点の調査が行われている。

②調査の概要

唐人町跡からは、華南三彩陶器をはじめ、中国産を主体とする貿易陶磁器やヨーロッパ産のガラス製品が比較的多くみられ、商業活動と密接な分銅の出土や骨牌^{こつぱい}といった希少な遺物も出土している。また、鞆羽口や金床石の可能性のある石材、埴塙などが検出されており、付近に鍛冶関連遺構の存在が想定される。

唐人町には中国産陶磁器の輸入を直接扱う人物、金属器生産に関わる職人が居住していたことも推測され、唐人町には多様な商職人が暮らしていたことが明らかになった。ガラス製品もそのような人々が交易を通して手に入れたものと考えられる。

唐人町西側：片側町段階には町の東側を南北に延びる堀(町80SD201)で区画しており、全容は不明であるが他の町屋にはみられない外郭施設が存在すると考えられる。島津軍の豊後侵攻以後も町屋として存続するようである。

唐人町東側：唐人町東側は、町屋が形成される以前は、暦応4年(1341)に創建されたとされる時宗寺院称名寺^{しょうみょうじ}の寺域であり、調査の結果からも14～15世紀に称名寺が存在したことが判明している。その後、称名寺が当地を移転した後、16世紀後半～1586年の島津軍の豊後侵攻の間は、大規模な堀を巡らせ、低い土塁または築地とみられる遺構をとまなう公的な施設と考えられる「大規模施設」が形成される。島津軍の豊後侵攻後には「大規模施設」は再建されず、堀が埋め戻されたあと、町屋が形成され、唐人町は両側町となる。

【南北道路西側の町屋（唐人町西側）】

南北道路西側	町 14 次・町 80 次	
概要	南北道路より約 20m 奥にあたり、町屋の裏手が想定される地点	
遺構	建物等	【両側町段階】 推定建物 B：南北 5.7m×東西 5.4m+ α 程度。 その他、東西方向の柵または柱穴列あり
	井戸	【片側町段階】 SE128(井戸底側面を三和土で補強)SE230（桶組井戸）、SE250 【両側町段階】 SE240（鉄線引きの瓦出土）、SE260（唐津焼出土）、 SE270（土師質製筒型井戸枠）
	堀	【片側町段階】 町 80SD201：幅 1.6m 以上、深さ 1.4m、長さ 30m 以上。 大規模な掘り直しを行う。

【南北道路東側の町屋（唐人町東側）】（両側町段階）

南北道路東側	町 11・72・80・88 次	
概要	南北道路東側約 30m 幅を調査しており、町屋の表から裏手までが一望できる地点	
遺構	建物等	礎石建物 1：北側に張り出し部をもつ東西 2 間（3.95m）、南北 3 間（4.48m）。 1 間は 6 尺 5 寸（197 cm）を基準。 礎石建物 2：東西 2 間（4.0m 程）、南北 3～4 間程度（5.0m） 礎石建物 3：礎石 2 個のみが残る。
	井戸	町 72SE002、町 80SE001（凝灰岩製石組）、町 80SE002（凝灰岩製石組）、 町 80SE173

【南北道路と木戸】

南北道路	町 11・72・80・88 次	
概要	大友館東側前面に所在する南北道路。唐人町南端と大友館・桜町との境界では東西道路である名ヶ小路と南北道路とが交差する「辻」を形成する。南北道路は直進せず、西側にクランクして交差する。	
遺構	道路	版築状の工法により築造。 【片側町段階】町 80SF094：幅員約 5.0m 【両側町段階】町 80SF006：幅員 4.0～5.0m、1590 年以降の唐津焼・瀬戸焼含む。
	側溝	【片側町段階】町 80SD090（西側溝）、町 80SD090・097（東側溝） 【両側町段階】町 80SD010・099（西側溝）、町 80SD016・030（東側溝）
	暗渠	【片側町段階】道路面下部に設定された暗渠。 太さ 0.15m の竹筒を横断させ道路側溝から溢れた排水を堀に流す構造。
	木戸跡	【片側町段階】一対の礎石（礎石間 2.2m）で構成。 島津侵攻に由来する焼土層で覆われる。
その他	唐人町前面の木戸は国道 10 号施工時に埋戻し現地保存されている。	

③ 調査の課題

第 1 期整備対象地である唐人町西側については、町 14 次調査以後実施されていないことから、今後は面的な調査を行い、具体的な町屋の建物配置・構造、その他の遺構の空間配置を検討する必要がある。

また、唐人町西側の南限を示す東西道路の存在は、発掘調査では明確には確認されていない。館の北外郭と唐人町に囲まれた東西道路の空間構成の把握も重要な調査課題のひとつである。

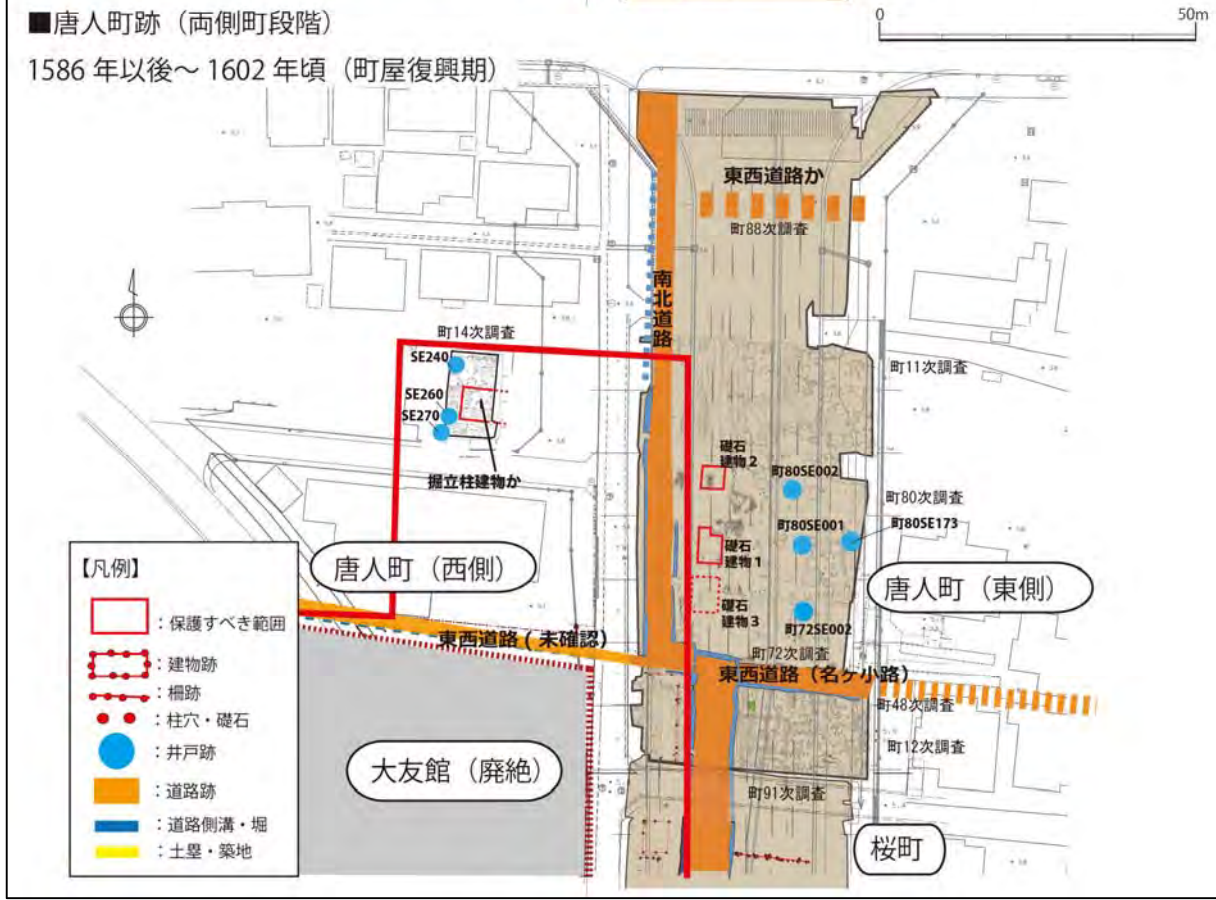


図 3-6 唐人町跡 遺構変遷図

(3) その他の地区

①旧万寿寺地区

旧万寿寺は、鎌倉時代末期の徳治元年（1306）に5代当主大友貞親が創建したと伝わる臨済宗寺院であり、府内のまちで最も早く建設された主要施設であった。禅宗式伽藍配置は、三門・仏殿・法堂・方丈を一直線に並べ、西に浴室・鐘楼・西浄、東に東司（東浄）・僧堂（禅堂）を配置し、三門の前に放生池を掘り、その前方に総門を建てるのが知られる。戦国期の万寿寺の施設を記述したといわれる「蔣山略記」には、三門が南に開き、仏殿、法堂、東西の方丈を、南北を軸とする中央に配置し、七堂伽藍も備えている一般的な禅宗式伽藍配置であったことが記されている。室町時代初期には十刹^{*}に列せられた高位の寺院でもあり、16世紀中頃～後半の時期には巨大な堀で寺域を囲み、寺域は南北約360m、東西250m以上、計7.2ha以上と京都の著名な禅宗寺院に匹敵する規模をもつ地方最大級の禅宗寺院であった。

旧万寿寺跡の地上にて確認できる遺構としては、伽藍を囲む北側の堀跡の地形が一部に残っている他、旧帆秋病院敷地内に残る伝経蔵跡地といわれる高まりがある。

なお、保護すべき範囲は、庄の原佐野線の道路用地を除いて、旧万寿寺の寺域とその北側に展開する堀之口町や清忠寺町を含む。

※五山十刹（ござんじっさつ）の制

鎌倉時代末期から南北朝期にかけての禅宗高揚期に、臨済宗を国家が掌握するために中国にならって導入された官寺制度である。幕府は、禅寺を五山・十刹・諸山の三段階に格付けし、住持（じゅうじ）（住職）の任命権・禅僧の階位などを官僚組織の統制化においた。なお、万寿寺は常に十刹の内に入る全国でも極めて格の高い寺院であった。

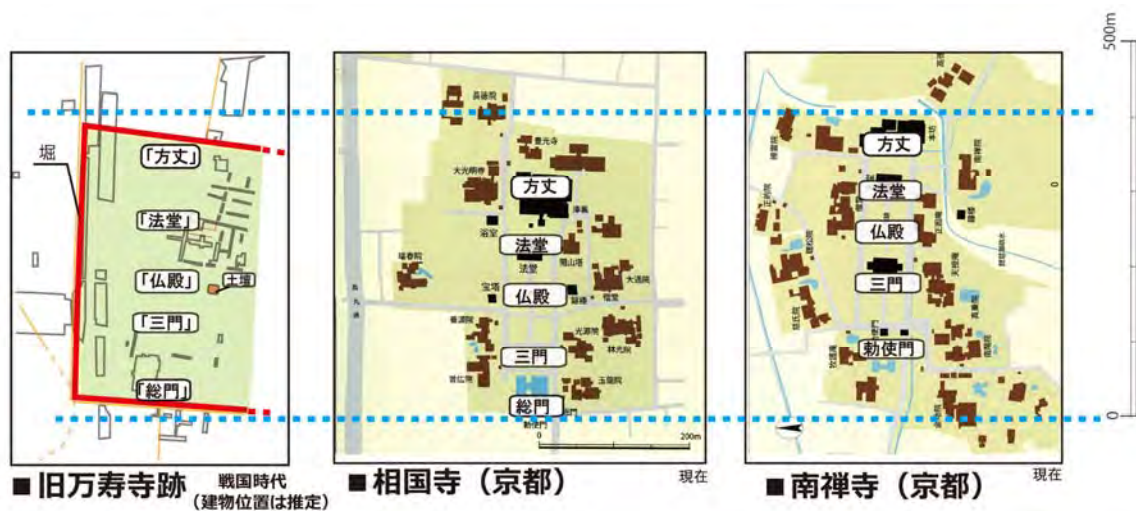


図 3-7 旧万寿寺跡と京都の禅宗寺院との規模比較

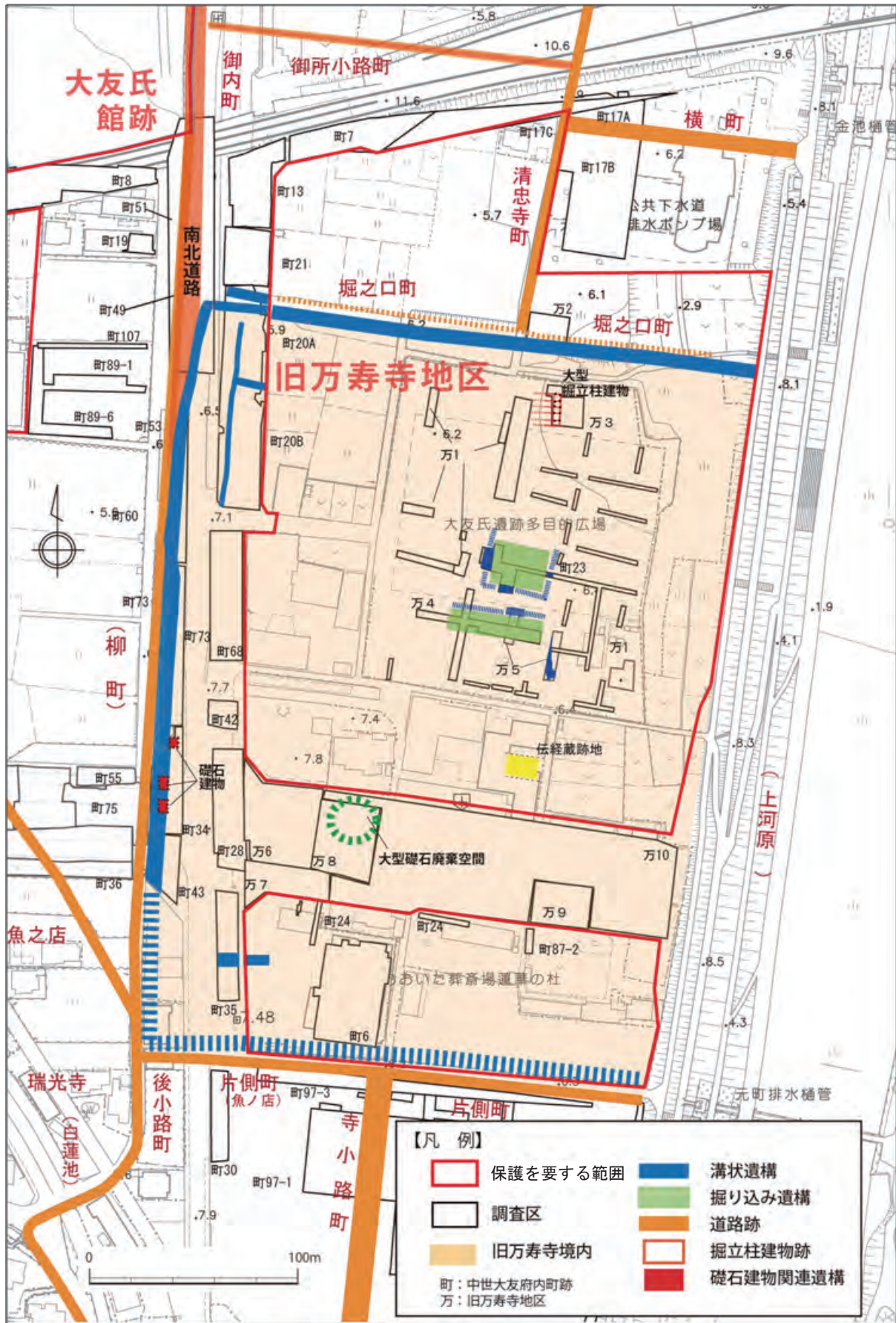


図 3-8 旧万寿寺地区 遺構配置図 (16 世紀中頃～後半頃の遺構を表示)

②推定御蔵場跡

1581年～1586年頃の府内を描いたと推定されている「府内古図」は、現在12枚ほどが確認されている。これらは図中に記載された各施設の有無などから、A類～C類の3種に分類されている。推定御蔵場跡とは、C類古図の中で、三方が白壁で囲まれ、内部に「御蔵場」「大友御蔵場」「蔵場」などと表記された地点をさす。

調査の結果、16世紀後半～末の大型施設と15世紀前後から16世紀中頃の武家居館と考えられる多量の土師器が投棄された穴や、「L」字に掘削された区画溝を確認した。

16世紀後半～末頃になると、東・西・南・北を画する溝や築地状の遺構を備えた大型施設が形成される。施設内部には掘立柱建物跡や火災処理土坑とともに、広い空閑地が複数地点で確認されており、これまでの調査で確認されている町屋や武家・社寺地とは異なる様相を示すことが明らかとなっている。この大型施設は、東西約205m、南北約85mの長方形の範囲に概ね収まり、南東部(東西約85m、南北約20m)の張り出し部を含む面積約1.8haの「L」字の範囲であると考えられる。

詳細は、今後の調査によるところも多いが、この範囲は蔵場としての利用を含め大友館に付帯する特別な公共空間として性格付けられる。

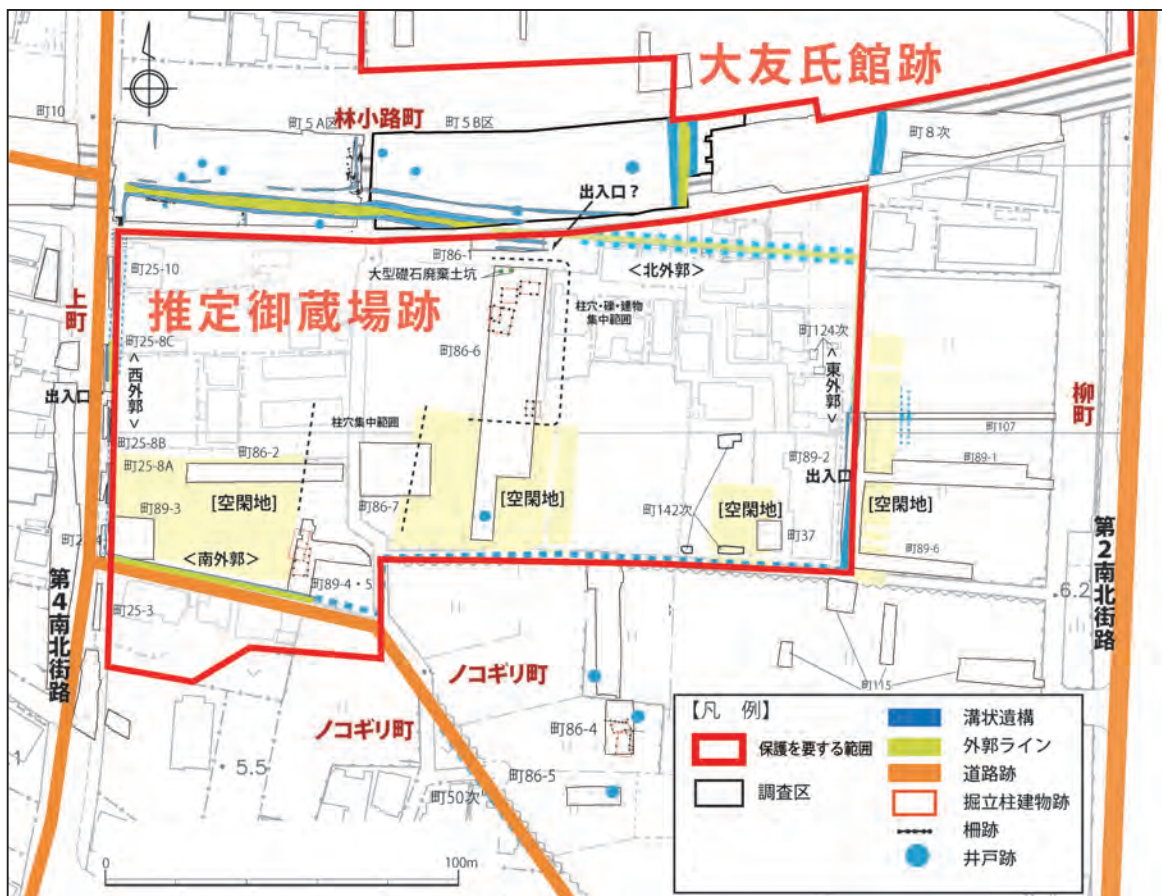


図 3-9 推定御蔵場跡 遺構配置図 (16世紀後半～末頃の遺構を表示)

③上原館跡

上原館跡は、上野台地に立地し、大規模な土塁や空堀を有するため、大友氏館跡と比較すると、防御に特段の配慮がなされた城館である。15世紀後半以降に整備された後、16世紀後半～末に再整備されたと見られるが、16世紀代には、大友館と併存しており、高崎山山頂にある「高崎城」とともに、大友氏の軍事的役割を担う「機能分化した城館」であったと考えられる。上原館跡の規模は東西130m、南北156mであり、この北西部に南北40m、東西30mの張り出し部をもっている。周囲（西・南・東面）には幅10～30mの空堀がめぐる。現状で基底部幅約17m、高さ4mを超える土塁と堀跡の一部が良好に残っており、当時の面影を今に伝えている。

上原館跡は天正14年（1586）の島津氏侵攻を受けた後、近世府内城が完成するまでの間、当主の拠点として機能していたことが想定されている。計画的な発掘調査による内部の空間配置の究明を行うとともに近世城郭として再整備された可能性についても、今後の発掘調査によって明らかにする必要がある。

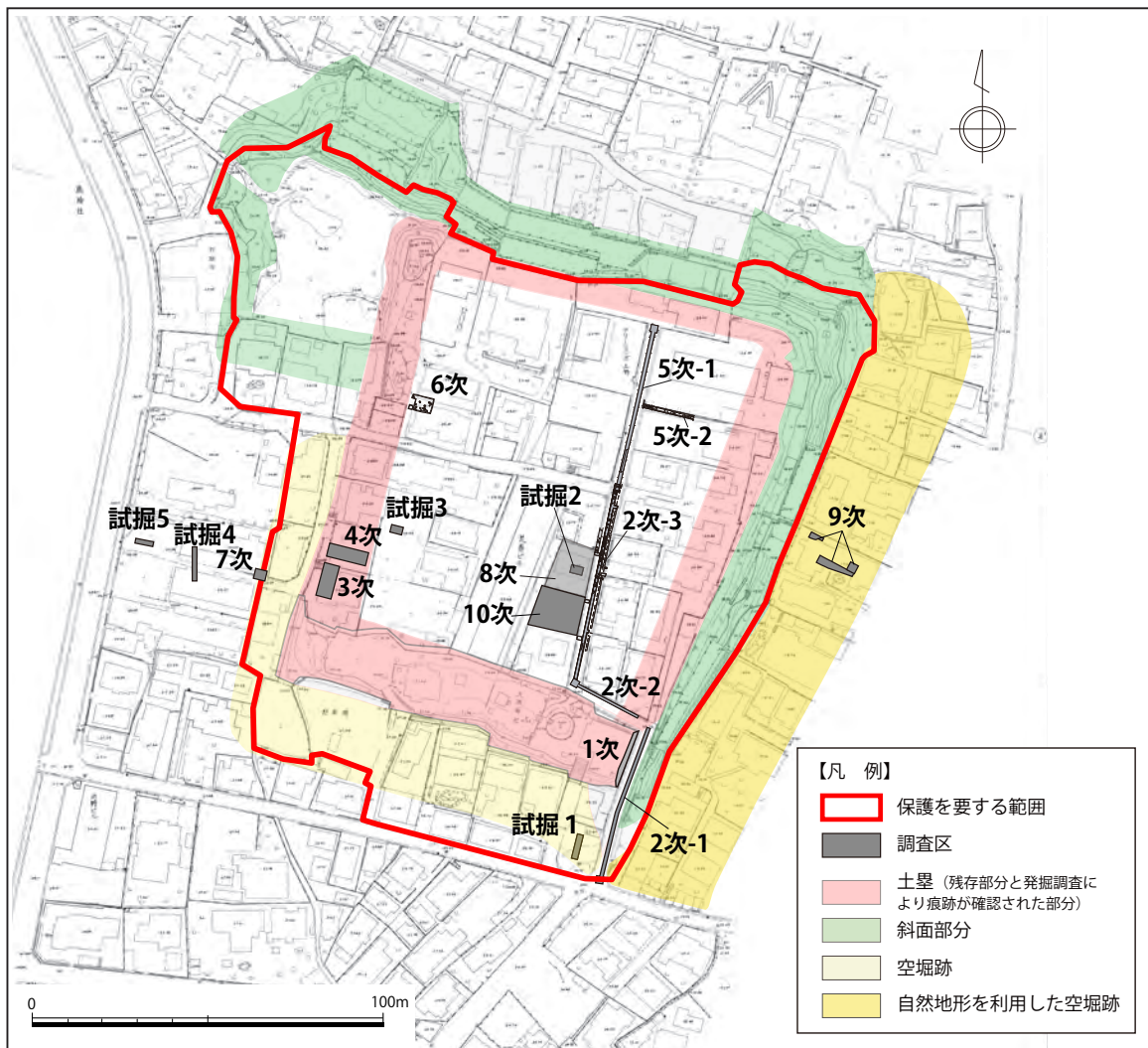


図 3-10 上原館跡 遺構配置図

4. 利便施設用地の概要

大友氏遺跡歴史公園において、史跡と一体的に活用を図る地区として位置づけている「利便施設用地」とは、歴史公園内にあって、史跡の公開に必要な諸施設を整備する地区である。利便施設用地には、歴史公園の導入部として駐車場やトイレ、休憩施設等とともに、大友氏遺跡を中心とした歴史ガイド機能や資料展示機能、飲食・物販機能等、複合的な機能を有する歴史文化観光拠点施設を整備することで、観光拠点としての役割を担い、多くの来訪者が集い交流できる空間づくりを目指すものである。

具体的には大友氏遺跡に隣接する3つの地区を指す。大友氏館跡の北側（利便施設A）、西側（利便施設B）、J R日豊本線を越えて南側（利便施設C）を計画している。このうち、第1期整備においては、利便施設A・Bが対象範囲である。

短期整備期間において、これらの一部について公有化が実現し、駐車場として整備したが、今後残余の土地についても取得を検討していく。

線路敷ボードウォーク広場

大友氏館跡西側の利便施設Bの一部には旧日豊本線の鉄道残存敷が含まれている。鉄道残存敷については、大分駅と歴史公園を結ぶ主要動線として歴史公園整備に連動した利活用が望まれることから、土地所有者であった大分県との間で公園的利用を前提とした整備に取り組む方針を確認していたが、平成29年3月に大分市が主体となって整備することが決定され、市都市計画部が平成29年度に基本設計、平成30年度に実施設計を行って工事に着工し、令和元年度に「線路敷ボードウォーク広場」として完成した。この整備では、大分駅から大友氏館跡までの約1.3km（歩行距離）のうち、金池保育所付近から大友氏館跡南側中央までの約440mが整備対象となり、歩行者と自転車が通行できる遊歩道とともに、修景のための植栽整備、大友氏館跡庭園を展望する眺望デッキ（ウッドデッキ）などが整備された。

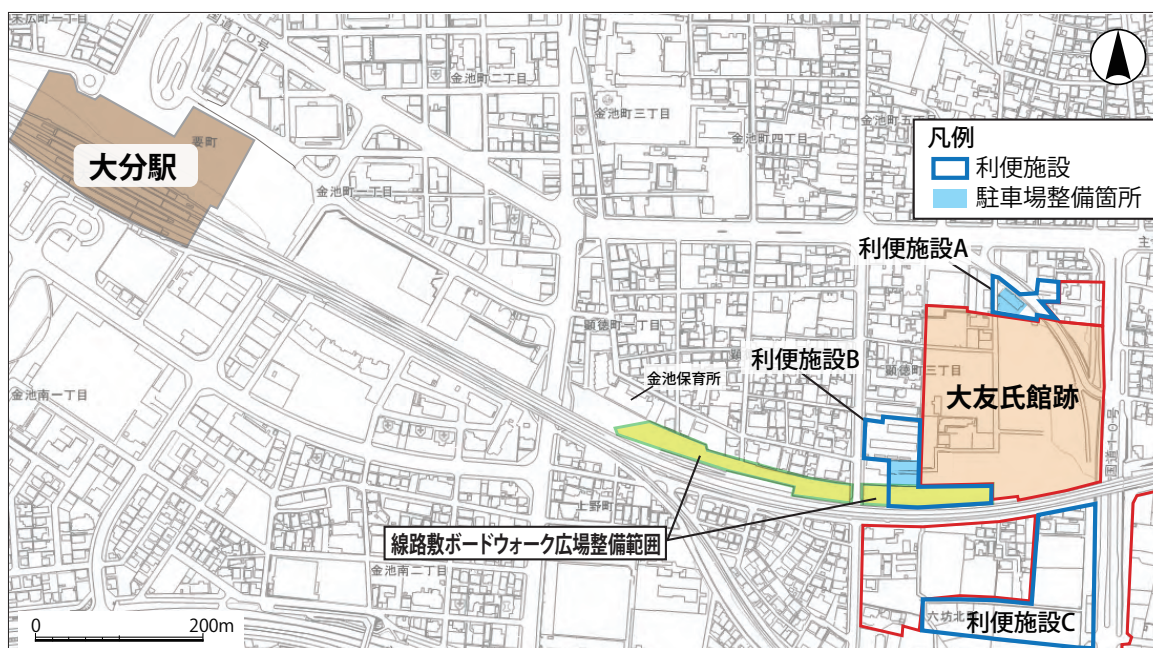


図 3-11 利便施設及び線路敷ボードウォーク広場整備箇所位置図



図 3-12 線路敷ボードウォーク広場整備イメージ図



図 3-13 線路敷ボードウォーク広場整備状況

5. 整備における検討課題と対応

(1) 現行基本計画で挙げられている課題

表 3-11 現行基本計画で挙げられている課題と対応状況

課題項目	内容	詳細内容	対応状況
A.遺跡保存に関する課題 (大友氏館跡・唐人町跡)	①遺跡の保存	第1期整備対象範囲である大友氏館と唐人町跡全域の史跡指定を進め、保存を図る必要がある。	◎概ね計画どおり
	②市道部分の指定	公園内市道の一部（市道顕徳8・9号線）の取扱いについては、地元との十分な調整が必要である。	×未着手
	③指定・公有化	史跡指定地の拡大及び公有化に向けた作業は、所有者等の要望や取得時期等について調整を行いながら手続きを進めていく必要がある。	◎概ね計画どおり
	④旧10号廃止・指定	市道顕徳10号線（旧国道10号）の廃止と史跡指定を行うためには、地元及び道路管理者との十分な調整が必要である。	×未着手
	⑤鉄道残存敷の指定	南外郭に所在する鉄道残存敷（大友氏館跡庭園の一部にあたる）の史跡指定に向けては、大分県との調整が必要である。	◎実施済み
	⑥国道10号歩道指定	国道10号の歩道部分の史跡指定について、国交省と協議を進める。	△引続き国交省と協議する
B.復元整備に関する課題 (大友氏館跡・唐人町跡)	①館の調査	大友氏館跡の整備においては、庭園域について中心建物域、西建物域、唐人町跡など、計画的に発掘調査を進めていく必要がある。	◎概ね計画どおり
	②国道10号歩道部の指定	国道10号歩道部には、大友氏館跡東側の一部が保存されており、今後史跡指定を行う必要がある。	△引続き国交省と協議する
	③国道10号歩道部の整備と活用	館東外郭・唐人町跡とともに、歴史公園への入口として機能するだけでなく、かつての都市空間を表現する場所として、歴史公園と一体的な整備活用に向けて関係機関と協議しつつ、南北道路の表示及び木戸の表現方法について検討する必要がある。	△引続き国交省と協議する
	④大友館大門跡の取り扱い	大友氏館跡の正門として的大门跡が確認された場合は、これを歴史公園の主導入口として利用することが望まれる。	△R1年度に調査 大門は復元整備を目指すものとし、館の正面として整備・活用上尊重していく。
C.公開活用に関する課題 (利便施設・その他周辺)	①利便施設用地の取得など	利便施設用地は、現在、国の所管する土地と民有地であり、今後大分市が取得して、整備の前提条件を整える必要がある。	○一部実施済み 利便施設A・Bの各一部を取得、駐車場整備した。
	②第1期整備における主たる導入部	基本構想において利便施設Cに位置づけた大友氏遺跡の主たる導入部は、第1期整備対象範囲の中で対処できる方法や場所を検討する必要がある。	○実施済み 鉄道残存敷経由のアプローチ整備に対応し、館南西側・南側を主たる導入部とする。
	③第1期整備における学習交流施設	基本構想において利便施設Cに位置づけた学習交流施設は、第1期整備対象範囲の中で対処できる方法や場所について、検討する必要がある。	△引続き国交省と協議。「歴史文化観光拠点施設」の候補地として利便施設Bを検討する。

課題項目	内容	詳細内容	対応状況
C.公開活用に関する課題 (便利施設・その他周辺)	④円滑な誘導案内	暫定公開を実施している旧万寿寺地区との連携を考慮して、見学ルートを検討の上、円滑な誘導案内を行う必要がある。	○一部整備実施 JR高架下を横断し、大友氏館跡南に至る通路、大友氏館跡への案内サインを整備中。
	⑤段階的供用開始のための代替施設整備	第1期整備期間中、段階的な供用開始を行うため、便利施設完成までの代替施設について、計画地区内あるいは隣接部を利用することも含め検討する必要がある。	◎概ね計画どおり H30年度に仮ガイダンス施設として南蛮BVNGO交流館をオープンした。
	⑥歴史公園への導入口整備	館東側の国道10号歩道部と、大分駅からの高架側道顕徳町線及び高架側道六坊元町線は、歴史公園への導入口にふさわしい、景観に配慮した整備が重要である。	○一部整備実施 ※高架側道顕徳町線は廃止され、その計画地を含めて鉄道残存敷が整備された。
	⑦便利施設への効果的なアプローチ整備	便利施設の利用に際しては、中心市街地としての立地を活かし、大分駅からの徒歩やバス、自転車利用を優先し、本市が整備する既存のサイクリングロードとの連続性を検討する必要がある。	○一部整備実施 ※鉄道残存敷整備によって大分駅からの徒歩・自転車でのアプローチが整備された。

平成27年12月に策定した史跡大友氏遺跡整備基本計画（第1期）（以下、現行計画という）の中で挙げた整備における検討課題^{※1}について、課題内容別に再整理した上で、令和元年時点での対応状況を確認した結果を表3-11に示す。このうち未対応のものや継続協議を要するものなどについては、中期整備においても引き続き課題としてとらえ、解決に向けて取り組むものとする。

また、復元整備に関する調査課題については、おおむね現行計画の調査計画に沿って調査を実施できており、中期整備においても第5章に示す調査計画に基づいて調査を進め、課題の解決を図るよう努める。特に本書第3章3（P60）で述べたように、大友氏館跡に関しては依然として館内の空間構造の解明や文献にある建物・施設の考古学的確認といった調査課題が残っており、引き続き解明に向けた取組を継続する必要がある。

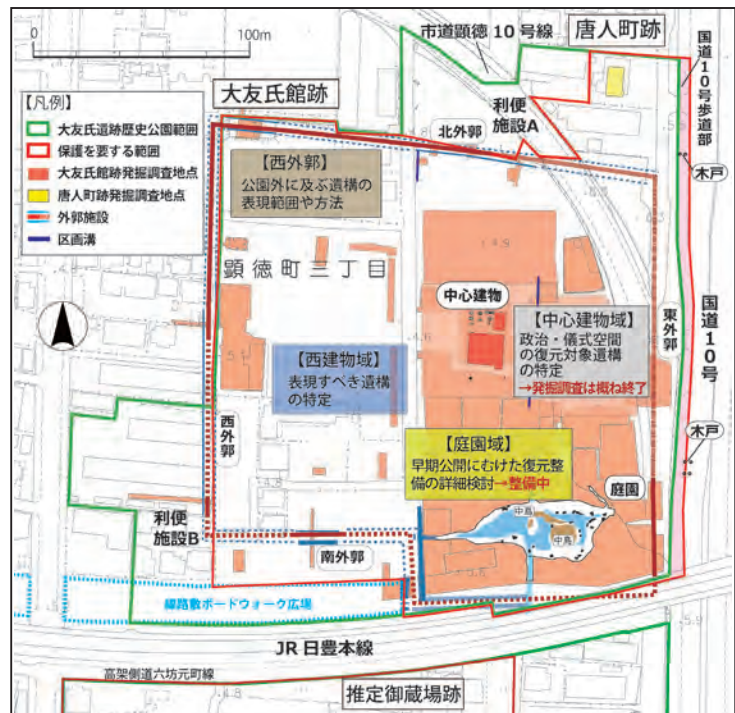


図3-14 復元整備に関する調査課題と対応状況^{※2}

※1 大分市教育委員会 2015『史跡大友氏遺跡整備基本計画（第1期）』P55～56

※2 前掲書 P55 図3-11「復元整備に関する調査課題の概略図」をもとに更新

(2) 新たな課題

表 3-12 新たに把握された課題と内容

課題項目	内容	詳細内容
D.史跡整備上の課題 (大友氏館跡)	①雨水排水整備	・既設の一般管では大友氏館跡全域の雨水排水能力が不足しており、北側の雨水幹線と接続する管の新設が必要
	②既設管路・電柱整理	・既設の上下水道管・電柱等は、公有化前の住宅地を前提としており、整理・再整備(電柱は地中化)が必要
	③未撤去基礎等撤去	・史跡を公有化する際、既存の住宅等の浄化槽や建物基礎など地下埋設物の多くが撤去されていないため、整備工事に先立って、遺構保存を図りながら撤去する必要がある。
	④整備基金の設置	・大友氏遺跡を大分市のシンボルとして、産官民一体となって整備事業を円滑に進める機運を醸成するため、中期計画公表の機会をとらえ、財源の確保に向けて大友氏遺跡事業に関する基金設置の検討が必要である
	⑤国の支援確保	・大友氏遺跡の史跡範囲以外の整備を進めていくための財源確保として国からの支援が必要である。
E.交通アクセス・動線に関する課題	①公共交通機関の充実	・大友氏館跡への来訪者が利用しやすい公共交通機関の整備が必要
	②交通拠点からの効果的な案内	・来訪者が大友氏館跡に向かう起点となる大分駅において適切な案内・誘導を行う必要がある。
F.情報発信及び活用に関する課題	①大友氏遺跡の認知度の向上	大友氏遺跡は歴史的文化遺産としての価値は高いものの、認知度の低さが課題となっている。
	②効果的なプロモーション	大友氏館跡・南蛮BVNGO交流館への来訪者を増やすため、ターゲットとなる層に対して的確なプロモーションが必要。
	③IT技術進歩への対応	将来的なIT技術進歩に応じた情報発信や史跡活用方法が必要
	④市民との連携強化	行政機関だけでなく市民の参加による史跡整備が望まれる

課題項目	内容	詳細内容
F.情報発信及び活用に関する課題	⑤次世代への浸透・定着	大友氏遺跡を小中学生をはじめとする若い世代の意識に定着させ、郷土愛の醸成につなげる必要がある
	⑥史跡公園の多目的利用	地域住民が利用しやすい公園や施設整備とすることが必要
	⑦大友氏館跡出土遺物の展示	南蛮BVNGO交流館には大友氏館出土遺物展示がほとんど無いが、来訪者からは出土遺物の展示要望が多い。
	⑧大友氏遺跡出土重要文化財ほか関連資料の展示	重要文化財となった大友氏遺跡出土資料(県所蔵)をはじめ、将来重文指定されるとみられる市調査分の出土資料の展示・公開が求められている。
	⑨大友氏遺跡出土資料の重要文化財指定	市の実施した発掘調査で出土した資料のうち重要なものを重要文化財に指定する。
G.周辺整備に関する課題	①景観形成	良好な景観を形成するため、歴史公園周辺の建築物や広告に対して規制が必要
	②回遊性の確保	・府内城跡等、他の近隣史跡地や観光施設等を含めた回遊性をもたせる必要がある。

史跡大友氏遺跡整備基本計画の改訂にあたっては、前項で検討した現行基本計画に掲げられた課題項目以外にも、整備における検討課題があるか改めて検討し、その結果把握された課題を「新たな課題」として取り上げる。

このうち、Dの各項目については、史跡整備事業推進の前提となる項目であり、確実に解決できるよう取り組むものとする。

このほかの課題項目E～Gについては、短期整備により大友氏遺跡の整備が一定程度進捗した結果、具体化してきた課題が多くみられる。これらは中期整備において解決すべき課題としてとらえ、第5章整備基本計画(第1期)に反映させ、解決に向けて取り組むものとする。

6. 短期整備の進捗状況について

平成27年12月に現行の基本計画を策定した後、「おおむね5年」とした短期整備に着手し、大友氏館跡庭園の整備を中心と、大友氏館跡の公有化を中心に事業をすすめてきた。

短期整備最終年段階における計画の進捗状況については、下表のとおりである。

このうち、大友氏館跡庭園整備、中心建物域の発掘調査及び報告書作成、大友氏館跡の公有化については、ほぼ計画どおりに進捗していると言って良い。一方で、唐人町跡の公有化、旧万寿寺地区の基盤整備については遅れが発生しており、計画内容を見直したうえで中期整備において位置づける必要がある。

利便施設に関しては、大友氏遺跡体験学習館を更新し、整備の進む大友氏館跡側に「南蛮BVNGO交流館」を新設し、利便施設A・Bについてはそれぞれ一部の公有化が実現し、駐車場として整備した。一方、旧顕徳町資料室は老朽化が著しいことから平成30年度に解体した。

■第1期整備事業工程

大区分	年次 地区・施設	第1期整備						短期整備最終年における 整備状況	
		短期							
		H27	H28	H29	H30	H31	H32		
史跡大友氏遺跡（予定地含む）	大友氏館跡	庭園域	発掘調査・調査報告書刊行		基本設計・実施設計		工事	供用開始	◎概ね計画どおり進捗
		中心建物域	発掘調査		調査報告書刊行・建物復元調査研究				◎概ね計画どおり進捗
		外郭域 北建物域 西建物域 等	公有化・史跡指定						◎概ね計画どおり進捗
	唐人町跡					史跡指定		△計画より遅れている 中期整備で行う	
	旧万寿寺地区	基盤整備						△計画より遅れている 中期整備で行う	
	推定御蔵場跡								
	上原館跡								
利便施設	公開・活用 のための 施設	学習交流施設	基本構想・基本計画		基本設計・実施設計（建築・展示）				△庁内検討のみ実施 中期整備で行う
		体験学習館 （既設）			管理運営				※閉館し、南蛮BVNGO交流館 を新設
	管理施設 便益施設 等	利便施設A	公有化						○一部を公有化し、駐車場整備
		利便施設B	公有化						○一部を公有化し、駐車場整備
		旧顕徳町資料室 （暫定利用）			仮設壊所整備				※老朽化のためH30に解体
		JR日豊本線高架下 （暫定利用）			仮設駐車場整備				○利用契約済み

『史跡大友氏遺跡整備基本計画（第1期）』91ページより

表 3-13 第1期整備（短期整備）の進捗状況